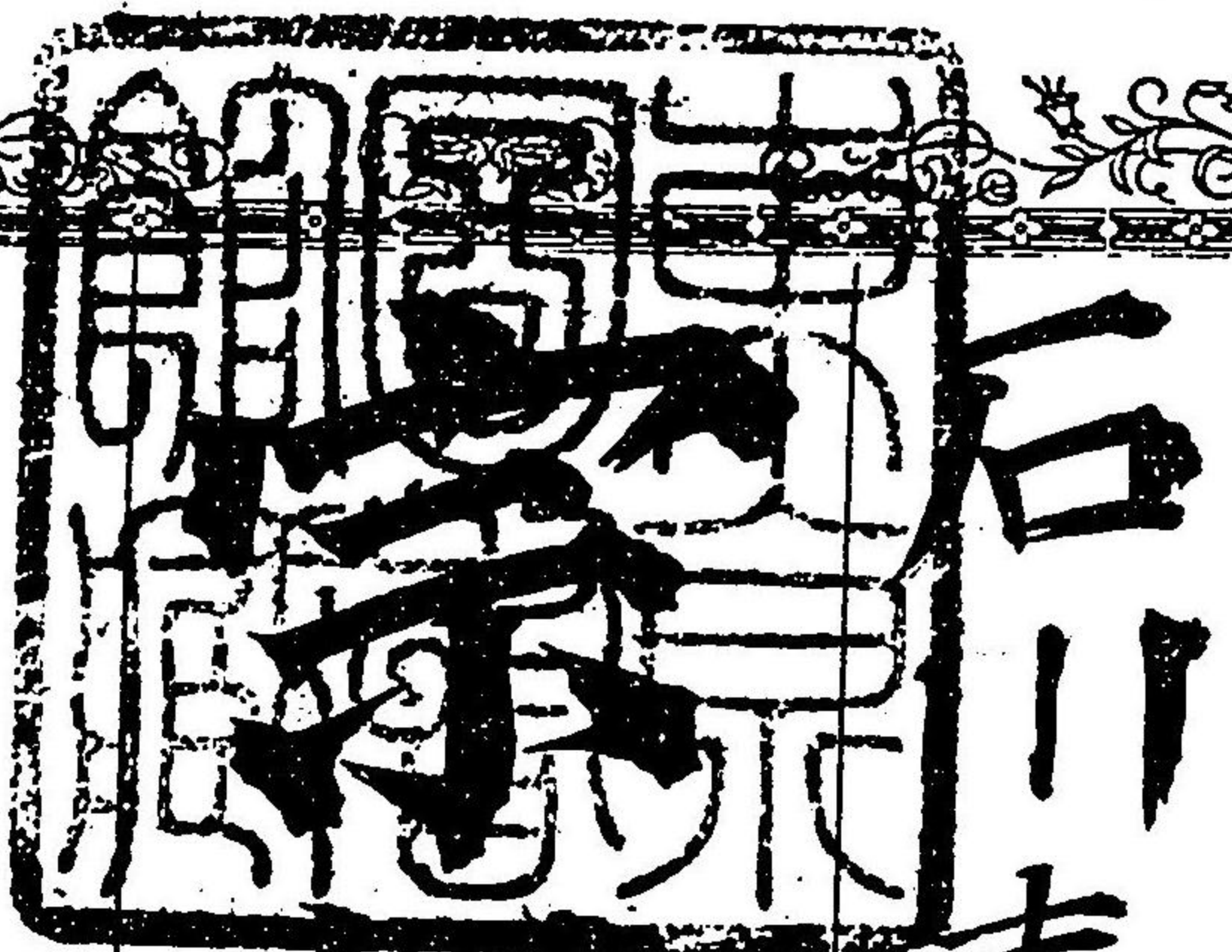


工2P42

№1564



石川喜三郎著  
宗教哲學

哲學書院



013627-000-6

17-162

宗教哲學

石川 喜三郎 / 著

M22

ABA-0096





宗教哲學序

凡そ眞正の文明あるものは、皆に社會、智識の開發にのみ縁るものに非き、必ず道德の進歩、之れと調和せずんばあらざる也。若夫れ智識開け、學術進み、工藝隆盛を極むるも、社會の道德、依然として、未開野蠻の陋習を脱するあくんば、何ぞ眞正の文明と謂ふ可けんや。學者試に、我邦文明の眞相を觀察せよ、其今日の開明は、果して眞正文明の性質を有するものなる乎、否か未だ眞正文明の性質を有するものと云ふ可らず、何とあれば、我邦今日の開化は、只だ是れ智識上の開化にして、未だ道德上の開化にあらざれば也。今且歐米開化の状態を察する

(一)



序 文

(二) に設令文明を以て宇内に矜誇するも、猶未だ智識上の開化のみ、然りと雖ども既に道德開化の源泉、之が基礎を爲すあるを以て、眞正の文明を將來に期すべし。我邦の開化に至りては、本是れ歐米文化の皮相なれば、吾人其基本とする所、いづくに在るを知らず、且つ將來我邦の開化の如何ある方向を取て運動するやを知らざる也。然れども吾人之を不問に附して止むべきにわらず、宜しく進んで我邦文化の基本を發見し、文明進歩の方向を計畫せざるべからざる也。夫れ社會の進歩を永久に期し、國家を泰山の安きに置かんと欲せば、必き先づ、開化の基本とあり、文明の精神とあるべきものを確定

序 文

(三) せざるべからず。然らば則ち能く開化の基本とあり、文明の精神とあるものは果して何ぞや、眞正高尙の道德。是れなり。然らば吾人の眞正高尙の道德を何所に發見すべき哉、是れ固より一朝一夕の議論を以て決すべからざる問題ありと雖ども、之を要するに道德の基礎、倫理の大本とあるべきもの、萬世不易なる眞正完全の宗教からざるべからず。且夫れ眞正宗教あるもの、管に道德の基礎、倫理の大本を確定するに於て効績あるのみならず、社會開化の基本とあり、文明進歩の方針となり、而人生幸福の一大要素を成立するものあり。吾人、天下今日の形勢を觀、文運の状態を察し、大に眞正宗教



(四)

の哲理を論ずるの必要を感じず不肖を省みず、宗教哲學一編を艸して之を世に公にす、學者請ふ之を諒せよ。

明治廿一年十二月十日

著 者 識

(一)

宗教哲學目錄

◎ 第一章

○ 宗教の本性を論ず

○ 第一節

○ 宗教と云ふ語の意義及び基源を論ず

○ 第二節

○ 靈界の存在を信するは宗教の本性あるを論ず

○ 第三節

○ 開明人の間にも靈界存在の信仰あるを論ず

○ 第四節

○ 神人二者の關係ハ宗教の本性たるを論ず

(一)

(五)

(一一)

(一五)



目 録

(二)

◎ 第貳章

- 宗教の本性を論ず……………(一八)
- 前章と本章の關係を論ず……………(二一)
- 第二節……………(二一)
- 宗教と學術の關係を論ず……………(二七)
- 第三節……………(二七)
- 宗教と哲學の關係を論ず……………(四二)
- 第四節……………(四二)
- 宗教と美術の關係を論ず……………(五一)
- 第五節……………(五一)
- 美術發生と宗教發生の關係を論ず……………(五六)
- 第六節……………(五六)

目 録

(三)

◎ 第參章

- 美術と宗教の關係の互に相反對せざるを論ず……………(六〇)
- 第七節……………(六〇)
- 美術と宗教の關係の同一ならざるを論ず……………(六七)
- 第八節……………(六七)
- 宗教と道德の關係を論ず……………(七四)
- 第一節……………(七四)
- 眞理と人智の關係を論ず……………(七九)
- 第二節……………(七九)
- 眞理と哲學、學術、宗教の關係を論ず……………(八九)
- 第三節……………(八九)



目 録

(四)

○ 宗教、哲學、學術の三者は共に眞理に達するの道なるを論ず

○ 第四節

(九四)

○ 宗教、學術、哲學の三者は互に相反對せざるを論ず

○ 第五節

(九九)

○ 宗教、學術、哲學の三者の同一あらざるを論ず

○ 第六節

(一〇三)

○ 三大道を合せ進む非ざれば人類の目的を達する事能ざるを論ず

○ 第四章

○ 宗教發生の基源を論ず

○ 第一節

(一〇五)

目 録

(五)

○ 人間は本然に神の觀念を有するを論ず

○ 第二節

(一〇九)

○ 根源の神の觀念を論ず

○ 第三節

(一一三)

○ 哲學的の神の觀念を論ず

○ 第四節

(一二六)

○ 感情及び道義性の神の觀念を論ず

○ 第五章

○ 宗教の發生を論ず

○ 第一節

(一二九)

○ 根本の神之觀念の開發を論ず

○ 第二節

(一二五)



目 録

(六)

○哲學的の神之觀念の開發を論ず

○第三節……………(一三三)

○感情及び道義性の神之觀念の開發を論ず

◎第六章

○客觀的宗教發生論を駁す

○第一節……………(一三七)

○構想的宗教發生論を駁す

○第二節……………(一四二)

○自然的宗教發生論を駁す

○第三節……………(一四六)

○超理的宗教發生論を駁す

目 録

(七)

◎第七章

○主觀的宗教發生論を駁す

○第一節……………(一四九)

○動物性宗教發生論を駁す

○第二節……………(一五五)

○主我的宗教發生論を駁す

○第三節……………(一五九)

○厭世的宗教發生論を駁す

○第四節……………(一六三)

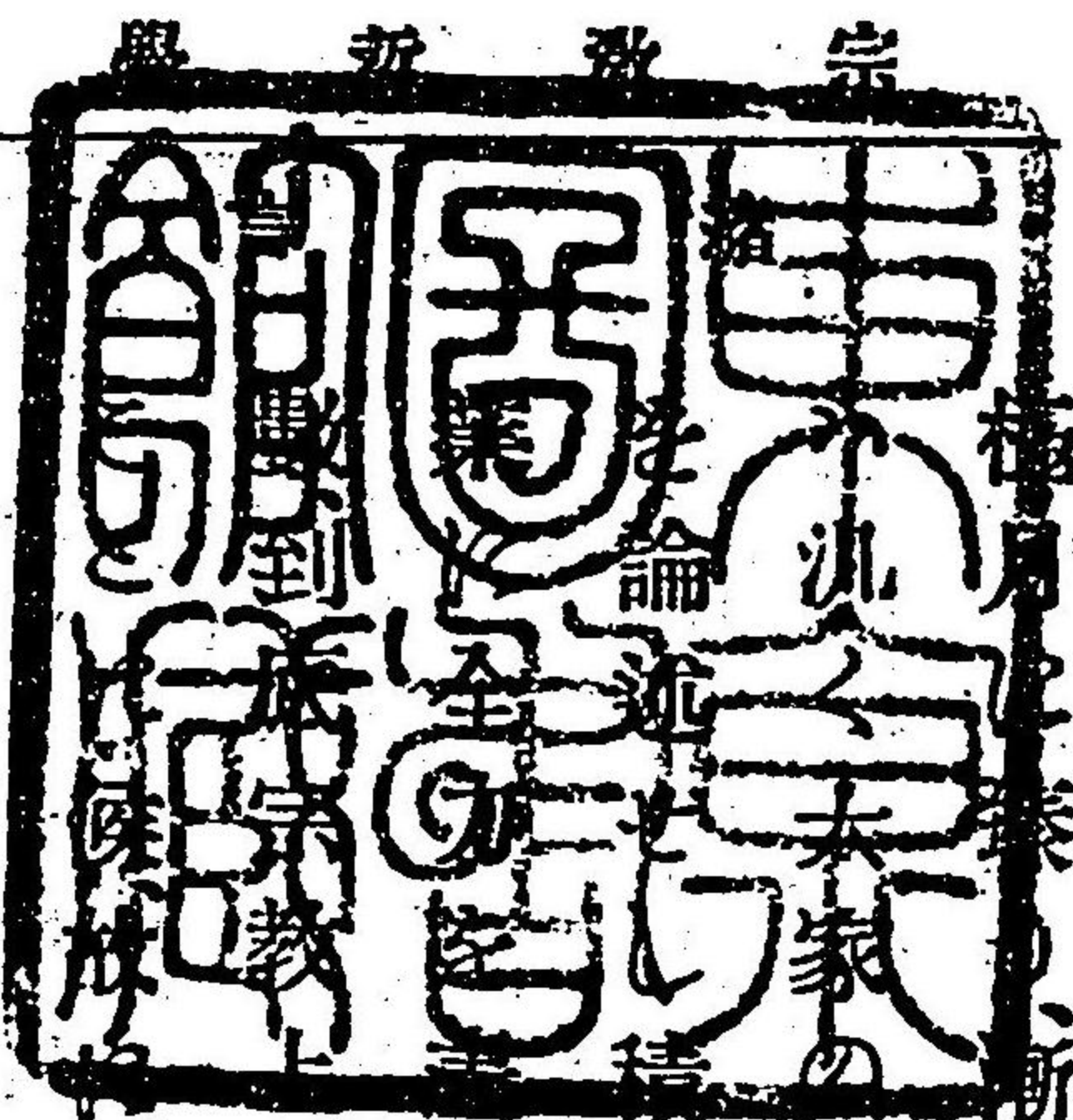
○進化的宗教發生論を駁す

宗教哲學目錄終



緒言

此の書は、一昨年来修學の餘暇、節を草し章を編み、舊臘



極月、漸く積むて一小冊子を成せるものに候。右  
 所論を攻究して、宗教一般に通ずる哲理  
 りに候へども、自分ハ未だ編纂著述の專  
 ず者にあらざれば、僅々の餘暇、些少の紙  
 の一切道理を網羅説盡し得べからざる  
 本書ハ唯だ宗教一般に通ずる性質を解  
 剖して、真正の宗教ハ如何ある資質、如何ある品格を有  
 するものあるやを略論せる迄に候。去れば宗教内部の  
 (一) 理論、例之は人心不滅の理、又は眞神實在の理と云ふが



(二)

如き問題ハ、編中毫末も論及せざる所に候、尤も宗教内  
部の理論ハ、極めて高尚深玄ある哲學上の理論あれば、  
幾多の螢案雪牕の苦學を經、充分揣摩を遂けたる後か  
らでハ、自家の識見を叙述し得ざるとと攷へられ候、既  
に陳述せし如く、本書は宗教一般の道理を理學的に論  
究せるものに候へば、宗教上の定理、若くは教會内の規  
定等ハ、助めて之を避け、専ら立論を理學上に資りたれ  
ども、其根據とする所は、やはり基督教の眞理に外あら  
ざれば、不知不識の間に正徑を脱して、宗教定理或ハ教  
會律法に拘泥し、若くは立論の背理や論說の誤謬無き  
を保し難ければ、江湖の諸君子、伏藏かく此正を下し賜

(三)

は、自分か無上の面目に候。又文章は字義を吟味する  
の勞を省かんが爲り、一意平易を旨としたれども、未練  
未熟の毛卒を指麾して、神秘奥妙ある宗教の牙城を衝  
かんとすることなれば、筆端蹙跼文辭陋澁、往々解し難  
き點も多からん乎、是れ固より自分未熟の致せる失策  
あれば、其譴責は甘受する所に候、自今膽を練り文を磨  
き、他日謝罪可致と心潜かに期居候。元來自分は黃口一  
介の書生あれば、宗教哲學の著述に従事せんとするか  
如きは、難事の中の最も難事なるも、仍は秃筆を揮て此の  
難きに當らんと欲する所以のものは、蓋し一片丹心の  
ある有りて、江湖の嘲嗤を顧みるに違わらず。茲に之を



(四)

公にするに至り候。世の學者、行文の拙陋あるを以て之を捨てず、一讀の勞を愛まざるは幸甚。

明治二十有二年一月中院

著者謹識

宗 教 哲 學

石 川 喜 三 郎 著

◎第一章 宗教の本性を論ず

此の章に於ては宗教と云ふ語に確實なる定義を下し、以て宗教の性質を概論せ、如何なるものを宗教と名くべきか、宗教の如何なる本性を有するものあるかを略述して、第二章以下の理論に入るの準備とするものあり。

○第一節

宗教と云ふ語の基源

宗教全體に關係する理法を論究せんと欲せば、先づ宗教の本性を論ぜざるべからず、宗教の本性を論究せんとするには先づ宗教と云ふもの本義を論述して、確實ある定義を立てざるべからず。然るに古來宗教を論ずる者、宗教と云ふ語の字義を解釋すれば、其れにて是が定義を立

(一)



(二)

て得たりとすれど、未だ以て當を得たるものと云ふべからず、然れども今姑く先輩の例に由て宗教と云ふ語の基源及び意義を解釋せんとする也。

第 一 節

宗教と云ふ語の基源を探るに、元來この語は單純なる意義を有する語にして、敢て今日の如き復雜なる意義を有せる語に非ざりしと雖ども、人智の開發、學術の進歩するにつれ、次第に復雜なる意義を加へて、今日の有様になれるなり。

第 一 章

(三)

する所の教義に附するにかゝる名稱を以てせりと云ふ。羅典の學者セルウェイスリップツイ、マズリイサベンは、此レリションと云ふ語を、レリクエンと云ふ語より轉用せりと云ふ説もあれど、宗教と云ふ語の意義に至りては大同小異なれば何れにするも不可なきなり。基督教の學者レクタンツイと云ふ人は、宗教と云ふ語を、レリガール即ち結合と云ふ語より轉化し來りて、レリションは、神と人の結合なりと解釋せり。イェロニム及びアウグスチンの如き人々も同一の解釋を主張せり。然どもアウグスチンは宗教と云ふ語を、レリリグールと云語より轉化し來れるものとして、且つ宗教と云ふ語には、再興の意義ありと論ぜり。近世セルマンの哲學者中には宗教と云ふ語に哲學的の意義を附し、魯國希臘其他の一二國に於ては宗教と云ふ語に、信仰或は神を信すると云ふ意義を附する者あるに至れり。近時我邦の學者中佛教を宇内に復興せんと試みる人々は、佛教を以て宗教、哲學混合の理學の一種なりと論じ、宗



(四)

教と云ふ語にも佛教の教義に相應せる釋義を附せり此の如く言語の意義上より宗教の意義を解釋せんとするは誠に難事たるを以て言語上の理論は斷然望なきものとし他の方法に由て宗教の本義を確定せざるべからず。

羅馬希臘の人々が宗教と云ふ語に就きて立てし解釋は特に其國々の宗教に相應せる釋義なり其一例を擧ぐれば羅馬人及び希臘人は宗教を以て人々か神靈を敬畏する事なりとしユウレイン民族も只だ神を畏るゝことを以て宗教の本義ありと思へるに相異あし基督教の時代となりてより宗教の意義は一變して前述の如くレクタン、イ、エ、ロ、ニ、ム、ア、ウ、シ、ス、チ、ン、の如き人々の解釋あるに至りたるなり斯の如き解釋は羅馬古代の宗教或はユウレイン民の宗教或は基督教の定義如何を確定する場合に相當せる解釋にして一般に宗教と云ふ者の解釋に適せざるなり廣き意味にて云ふ宗教は普く全世界の宗教を云ふ事なれば二三の

第 一 節

第 一 章

宗教に於てのみ發見せる性質を擧げて宗教一般の定義とするを得ざるなり宗教一般の定義を立てんばは全世界の宗教を普く分解して其一般に普通する性質を以て宗教の本義とささるべからずかくして發見せる性質を即宗教の本性なりとす然るに余は普く世上の宗教を分解して左の二性質は宗教一般の本性ある事を發見せり即靈界存在の信仰人と神との關係の信仰是れあり右二項は宗教一般の通有性あり是れ實に宗教の原性と稱すべき者なりこの原性の外に宗教の偏有性なるものあれども未だ原性なりや否やを確定するに至らざる不明の性質なるを以て姑らく之を稱して偏性と云ふ其詳細の如き以下

○ 第二節

靈界の存在を信するハ 宗教一般の本性なり

宗教を分解するの法に二法あり性質上の分解及び階級上の分解是れ

(五)



性物より不種の原に變遷すべし或地位上より下なるものなり

(六)

なり第一性質上の分解法の宗教を世界の場所に由て分解する方法なり即西洋或は東洋の宗教をいふ分解するものは是れなり第二階級上の分解法は開明の程度に依て宗教を分解するものとす今此に靈界存在の信仰の宗教一般の性質あるを論述せんには階級上の分解法を撮用して一切宗教を開明人の宗教と未開人の宗教とに區別するを便利なりと認むるなり然れども此法を以て精密なる分解區別の法とは云ふべからず如何となれば最下等の宗教より順次階級を逐て最上等に至る迄の宗教を一々分解し得ざるを以てなり然れども若し全世界の宗教を開明野蠻の二類に區別し二者何れにも靈界に關する信仰あるを發見せばこの性質を以て宗教一般の本性なりと斷定するを得べし然るに此に靈界と云ふて靈魂と云はざる所以のもの、靈界と云ふ一名目の中に人間の靈魂と靈魂の去り行く冥界とを含有するを以てあり故に靈界の信仰と云ふとき何時も靈魂と冥界の二者の信仰を

第 二 節

第 一 章

云ふ事なりと知るべし

凡そ靈界信仰の性質なきもの、宗教の名を命すべからず如何とされば我が靈魂の存する事を信ぜざる者には冥界の存すると云ふ信仰も亦く冥界の存すると云ふ信仰なければ神の存すると云ふ信仰も祖先の靈を祭ると云ふ思念も起らざるべし又犧牲供物を献げ若くは怪力神威を怖ると云ふ事も呪咀祈禱を行ふと云ふ事も起らざるべし此の如く靈界の存在を信仰する性質なきもの、宗教と名付らるべきものにあらざるあり若しそれ宗教をして宗教の本性おらしめんには必ず靈界の信仰あらざるべからず而して或る信仰亦くも儀式亦くも唯た靈界存在の信仰あれば既に宗教の性質を備へたるものとなさるべからず諸て是より宗教一般にこの信仰ある事を實事に徴して論述せんとす

(七)

何れの國何れの時代の蠻民も既に宗教の如きものを有する以上の必



(八)

第 二 節

「靈魂の存すると云ふ事を信ぜざる者の非ざるなり、然れども靈魂を以て今日開明人の信するが如き神妙なる靈體ありと信するには非ざるあり、この事第六章第七節進化宗教論を述るを俟て詳説すべし」先づ未開蕃民にこの信仰の存する次第を見んに、ミリガン氏の説によれば「タスマニア人種は自己を守護する靈魂の存するとを信じ、且つ「タスマニア」人種は其靈魂を稱して「ウアルラウワ」と云へり、是れは土人の語にして幽靈、怪物等の意味を含む語ありと、ニュウイングランドの諸人種に「シエマン」と云ふ語あり、この語は靈魂と云ふ意味を有するものにしてこの諸人種に靈魂の存する信仰あるを證するに足れり、エスキモト人種中には最下等の宗教中に「タイナック」ある語ありて靈魂、冥界の兩意を含めり、キーチンソ氏曰く、「チツベウ」人種は靈魂の時々旅行するとを信じ、且昏睡病其他氣絶者は靈魂の旅行中其の通路を抗拒せられ暫く身體に歸りて之を活動せしむる者なりと思惟せり」と。

第 一 章

(九)

又た諸方の野蠻人種中に於て、靈魂の身體を去るは冥界に旅行せんが爲めなりと信するもの多し、この信仰は蕃人の宗教の原子となり、この信仰よりして遂に死後冥界に於て賞罰ある事を信するに至れり、マイロル氏はオーストラリア人種、コント人種、グリーン人種、タル人種が靈魂の幽界に旅行すると云ふ事を信じ居るとを記載せり、かゝる信仰は彼等の宗教の原素ありと云へり、ハインド氏の説に據れば「クリ、イン、ヂヤアン」人種の一人が自己の一度死して幽界に行きし事あるを語り、と云へり、スペインセル氏の説に「ダコタ」人種は死人の冥土即ち冥界に獵せるとを信ぜりと云ふ、又たスカフデ、アウ、アの人種の如きも死人は冥土幽界に於て日々相戦ひ且筵席を開く者と信じたり、アウストラリヤ人種は魔鬼を信じ、幽界の存するとを信ぜり、南亞米利加の土蕃は冥界の存するを信ずると云ふ事は、ロジ、デ、スト、ウ、ン氏の神學書に見へたり、スペインセル氏の社會學に「ナイ」人種は人類が二の靈魂を有する



第 二 節

事を信ずると云ふ事ありたり、又た同書にキエーマナ(中央亞米利加)のインデアノ人種は靈魂は不死のものにて原野に住し、飲食するものと信する事を記せり。以上枚擧する無數の實事は至愚曠味なる野蠻人も靈界即ち靈魂と靈魂の死後に住居する冥界の信仰を有する事を馮証するものなり。こゝには唯だ靈魂或は冥界の信仰の事のみを述べて宗教の事を云はずと雖ども、彼の野蠻人は最下等の思想に於て既に宗教の形を備へたるものを有し、且つ以上開陳せるか如き信仰をも併有するものなれば正しく宗教と稱するに足る事は多言を要せざるあり。我邦に於ても未開の時代より、みたまの存する信仰及び天津國(もと)云ふ信仰あり、北海道の「アイノ」の宗教も亦他の蕃人の宗教に異なるなく、靈魂及び天堂の存在を信ずると云ふ事北海道日記及び「外人の我邦に於て發刊せられたる著書に見へたり。由是觀之如何に不完全なる宗教なりとも必ず靈界の信仰ある事明かあり。諸次には開明人の宗教にも

必ずこの信仰の存する次第を論述せん。

〇 第三節

開明人の間にも靈界存在の信仰ある事

第 一 章

第二節に於て、靈魂及び冥界の信仰の一般に野蠻人民の間に存する事を述べたるを以て、本節には開明人が宗教中にも右の如き信仰の充分に存することを述べんとするあり。野蠻人が靈魂に對して有する概念は一般に不明晰なりと雖ども、其開化の度に應じて種々ある見解を有するものなり。野蠻人の中に靈魂の唯だ眼に見へぬ實跡ありと信するものあり、例へば「ニカラキミア」の「インデアノ」人種の如きハ心臟(内部)に在りて見へぬ故と靈魂を同一視して心臟の天に登る事を信じ居ると云ふ、又た「チエーザ」氏の説に古代の「ピリウー」の「チンカ」人種に靈魂と心臟を同じ意味に云ふ語ありと、然とも靈魂を以て木石の如き物跡と同一なりと信する野蠻人の非ざるべし、多くは靈魂を以て氣狀跡の如き



(二一)

者と信せしなり例へば、イロコトイ入種の如きは靈魂をして再び入るを得せしめんが爲めに墓所に小孔を穿ち、又た或時の棺にも小孔を穿ちたりと云。其他靈魂の事に就き種々の思想を有する者あり、然れども開明人の靈魂に關する思想は遙かに高尚なりとす、中等以上の開明人に至りての高尚ある教育を受けざる者と雖ども、尙ほ靈魂を以て無形無象の妙躰ありと信する也。

節 三 第  
諸て今日世界中に最も高等なる開明の度に進みたる人民の歐米人なるが、彼の歐米人への基督教と云ふ堂々たる宗教ありて、靈魂の存在を信するのみならず、靈魂の不死不滅なることを信じ、又た天堂天國の存する事を信して死後人間の靈魂の天國に移り神造物者の光榮を直觀し、眞理の實躰を觀、且つ無限の靈樂を受くる事を信するなり、其信仰の全躰の純全たる宗教的なれど、基督教の唯一完全の宗教あるを以て人智の要求を飽かしむるに足る哲學の原理を包含するなり、故に基督教

第 一 章

(三一)

を信する歐米人の靈魂及び來世の冥界に關する思想の全く神靈的にして且高尚深遠なりと云ふべし。

全世界の二大教の一なる佛教を信する亞細亞人種の歐米と對頭の開明人種なり、而して印度、支那、緬甸、安南、日本、高麗、蒙古の人民の皆を靈魂の存する事、未來の世の存する事を信する民種なり、印度の人種の太古より開明の人種と稱せられたり、この人種の昔時より「ブラマ」の如き神を信して靈魂の不死ある事、靈魂の變生する事を信ぜり、又た冥土に靈魂の生活へて苦樂を受るを信せし事、輿地誌畧に見へたり、支那人の中にも同様なる信仰あるなり、然れども佛教の法理、孔孟教の聖理の上より論する時の佛教及び儒教を信する國々にも亦たかゝる信仰ありと云ふべし、いかにも不審なるべけれども、一般人民の信する佛教も孔孟教も彼の哲學的の佛教及び孔孟教に非ずと云ふ事を覺らば疑團容易に氷解すべし、近くは我邦の佛教信仰者を觀察するに日本國民の大半は



(四一)

第 三 節

佛教信者ありと雖も所謂佛教妄信者にして靈魂の存する事不死なる事及び地獄極樂のある事を信する者あり。太古開明の國あるペルシヤ トルコの人民も、マホメット教を信する人民なるか故に、靈魂のあると天堂のある事を信せり。羅馬希臘の人民は最古の開明人あり、エジプト民も亦た然り、彼の國々の人民は太古より靈魂の不死なると神國冥界の存するを信せり。エジプト民は大古最も開化せる人民にして人の死するは靈魂の身軀を去りたるものなれば、再び靈魂は身軀に歸り來る事あるべしと信じ、種々の工夫を盡して死軀を不朽に保存せんと欲せり。其他世界に存する無數の開明人の宗教には皆な同一の信仰あるを見るなり。されば靈魂の存する信仰及び冥界の信仰は全世界の人民の有する信仰なるを以て全世界の宗教に存する性質なりとす。故にこの靈界信仰の性質を以て宗教本性の一と爲す也。

第 一 章

(五一)

○ 第 四 節

神人關係の信仰は宗教の本性なる事

神人二者の關係を説かざるものは宗教の部に編入すべき者に非ざるあり、而して余茲に神と人の關係と云ふて、神と人の結合、或は人の神に於ける愛、或は神の信仰と云はざる所以は宗教の意義を敷衍して宗教と云ふ名目の下に、基督教、回教、猶太教の如き宗教のみならず他の多くの宗教をも含有せしむるか爲めなり。全世界の宗教は皆な神人二者の關係を説くものなり。例へば宗教を以て神と人との結合、或は「神と人の約束」と狭く論ずれども皆を神人二者の關係を説かざるはなし。則ち佛教の如きは哲學に屬すべきものなるや、或は宗教に屬すべきものなるや、今ま尙ほ疑問に屬する問題なるが余の管見を以てすれば、佛教なるものは其觀る所の異なるに由て宗教とも哲學ともあるものなり。故に僧侶の中にも佛教を以て哲學とするものあり、されど彼等は哲學的の佛教を信するものに非ずして唯だ同一の佛教を哲



第 四 節

學に面する一方より解釋を下せるあり、此の如く佛教は哲學のみならず、宗教の性質をも含有するものあり、換言すれば、佛教は宗教と哲學との混合教理なれば、神と人の關係と云ふ範圍の中に入るべきものなり、或は、眞如と人靈の如きは、神人二者關係の異名なり、以是觀之、佛教も亦た一の宗教なる哉、故に只た其宗教の異なるに由り、神人の關係を云ひ顯はす語言に於て異なる所ある耳、夫の基督教の眞理は、神と人の結合なり、既に神と人の結合なりとせば、基督教の教旨も神人二者の關係あらざるべからず、如何とされれば、神は人に關係し、人は神に關係すればこそ、無限神聖と有限靈聖の結合もでき、又た「約束」と云ふともできざるなれ、若し神人二者の干係なきときは、神人結

第 一 章

合の眞理を生出すとを得ざるへし、其他宗教を以て一神を信ずる者とすも、一神を愛する者とすも、或は怖るゝ者とすも、皆な二者の關係あればあり、人の神に對する關係あればこそ、或は信じ或は愛し或は怖るゝ事を得るものなれ、若し彼我の關係あくんば、信仰も愛も敬畏もあらざるべきなり、夫のユードヤ教は造物主と人間の關係を説き、回々教及、ヘルシヤツロアストルの宗教も亦た之を説けり、支那の孔孟教は天道と人間の關係、又たは、天、倫、人、倫の調和を説けり、是れ等は皆な高等なる宗教あるが、彼の動植物を以て神とする蕃民に於ても、尙ほ此の如き關係あるを見るを得べし、例令ば、木石を拜し、鬼神を敬畏する亞弗利加の土蠻の如きは、木石や動物等を以て人間の禍福を與奪すべき神なりと思ひ、是に對て加持祈禱するか如し、既に神を呼んで冥福を祈る以上は、豈に神人二者の關係なしとするを得んや、

以上論ずる所に由て視れば、神人二者の關係は宗教一般の本性なると



第 四 節

自ら明白なるべし故に神人二者の關係を宗教の中より抽き去るときは、宗教の本性たる要素の一を缺亡するを以て、宗教の性質を成立し能はざるや一目了然たり。

◎第二章 宗教の本性を論ず

此の章に於ても前章と同く宗教の本性を論述するものなれど、第一章に論するが如く、宗教其ものを分解して宗教の本性を論究するに非ず、唯た宗教及び是れに類する二三事を説きて彼是の差別を明白にし、以て宗教の本性を論述するもの也。

◎第一節

前章と本章の關係を論ず

前章に於ては宗教の本性を論するに正面分解法を以てせり、然るに本章の數節に於ては宗教の本性を論するに反面分解法を以てするもの

第 二 章

なり、第四章第一節より第四章第四節の間に、宗教の觀念を論述する所にも明了あるか如く、宗教は靈魂即ち心意の諸能力を統括するの勢力を有するものなれば、美術、學術、道德、哲學の如き、凡そ心意一切の諸能力を要するものと、宗教との間に密接なる關係を有するものなり。例へば簡單に心理學上の點より解釋するとき、は宗教と道德の恰も同類異種の如き外見を呈するものなり。然るに萬有の秘密奧義を解釋する宗教と萬有の理法を探究する學術、哲學との關係の如き、唯り心意の諸能力の上に親密なる關係を有するのみならず、其外面の性質及び彼是の目的の上にも大に密接なる關係を有するものあり、故に彼是の關係を考究して比較上より宗教の本性を論ぜざるべからず。偕て前章に於ては宗教と云ふものに廣き意義を與へ、靈界の信仰、神人二者關係の信仰を以て宗教固有の本性なりと論定せり。故よ其二性質を有するものは、開不開の宗教を問はず、皆ち宗教と云ふ名目を以て總括し得べきなり。然れど



(〇二)

宗教と學術の關係を論ずる

第一節

凡そ宗教を以て靈界の信仰及び神人二者の關係を有するものなりと云ふ本義のみにては宗教と宗教に相ひ類する者の關係を論ずるを得ざるなり。故に道德、學術、其他のものと宗教の關係を論述せんと欲するときば、こゝに宗教の標準を立てざるべからず、苟も人間根本の心性に基する宗教の標準を確立せんと欲するときは、未開不完全の宗教も資らずして世界中に最も進歩せる最も完全せる宗教を以て其標準とせざるべからず、然り而して方今最も完全に進歩せし宗教は基督教の右に出るものなし、故に本書に於て學術、道德と宗教の關係を論ずるときは、最も完全なる宗教にして基督教に存する一切の完全性質を含有するものと假定せざるべからず、諸て如斯く宗教を以て最も完全に進歩せるものなりとするときは、宗教は道德、美術、學術の如きものと如何なる關係を有するに至るや、今まこの關係を論述して宗教の本性を考究せんや、我々は其の必要ありと認むるなり、先づ我々の知る所の宗教を以てその標準とし、其の如何なるものなりと云ふことを論ずるなり、

宗教者學

第二章

〇第二節

宗教と學術の關係を論ずる

(一二)

諸て是より最完全の宗教と一般學術の關係如何を論述せんに宗教に於て諸般の教理を解得して心中に領解するの心意作用は智力にして、宗教の戒命教訓に法どり、貧者を憐れみ或は己れの無力を認め、全能者の完全力を思ひ、其の補助を祈願せんとするが如きは、心意の感情作用なり、其の貧者を憐むの感情を起して、他人の貧窮を救ふが如きは、道德心にして乃ち心意作用の意力に屬するなり、其他歴史の證明を信じ、他人の言を信用せんとするは、同く意志の關する所ありとす、然るに學術に於ては、重に如何なる心意作用を必要とするかを討ねるに、智力乃ち是れあり、觀察、概括、斷定、推理等皆な智力作用の高尙なるものにして、一切學術は觀察に始まり、推理に終り、以つて實用に適する理論を得るものあり、是を以て之を觀れば、宗教の教理を思想上考究する智力作



第 二 節

用と同一一般なりとす。故に其の外画より一見するとき、宗教も亦一の道理なるを以て、吾人は思想し思辨して教理の新機軸を工夫し、發明するを得るが如し。嘗だに外面に於てのみ然るにわらず、深く宗教の堂奥に入りて研究を遂けたる者と雖も、時としては、かゝる見解に陥る事を免れざるなり。是に於て乎始めて智力を以て宗教の主要なる心意作用ありとする説起れるなり。是れ即ち宗教、學術の區別を滅盡せんとせる諾斯士教ノクスチスムの主義なり。諾斯士教は第一世代の初期に起りたる基督教の一派なり。其詳細は第三章に於て詳論するを俟つべし。

夫れ學術上探究の目的となるものは何なりやと云ふに、萬有界の現象を統括する所の理法を發見すると是れなり。この理法を發見せんと欲すれば、實驗、觀察の方法を以てせざるべからず。然るに宗教に於て解釋する所の問題は、實驗、觀察を以て達し得べからざる道理なるをもて是を自然而上の道理とも云ふ。故に學術に於ては人間の罪惡の結果を論

第 二 章

究するを得るも、罪惡の原因に至りては既に實驗の範圍を超脱せるを以て、學術上に於て解答し得べき問題に非ざれば、宜く宗教上に於て解釋すべき問題なりとす。次章、哲學と宗教の關係論中にも細論する如く、神及人間に關する問題の如きは殊に學術に於て答解すべき問題に非ざるなり。元來學術と宗教とは其研究せんとする問題の目的を異にするを以て、彼是の間に整然たる區畫を存さざるべからず。學術に於ては其本分とする所の研究法に一定の區域を存するを以て、何時もこの區域範圍を超脱するを得ざるなり。例令ば物理學の如き又た動物學の如きも、實驗、觀察の範圍内に運動して理論を立つればこそ、始めて正當の理論を得て實地に施用し、人間の生活を益する事も大なれ。若し一朝其本分を誤り、實驗、觀察の研究法を脱出して理論を立てんとするときは、何時も空論に走り、理法に背き實益に遠かれる妄論に陥るべきあり。ダウソンの人類生來論、スペンセル氏の社會學の如きは、其一例なり。



そのもの  
テ社会の  
人生の  
ラ執拗  
い  
宗

學 哲 教

節 二 第

(四二)

如此き學術は其實無根の假定説にして學術の法則にも哲學の論法にも符合すべからざるの空論なり。若し一切の學術をして人類生來論や社會學の如くならしめば實確學術一變して未定の假想論となり實確學或は常識學と稱せらるゝ學術の真意を失ふに至るべし。學術が其の正當に守るべき範圍を出脱せるときは實驗觀察を以て攻究し得べからざる事を巧みに實驗せる如く觀察せる如く、又た推論に由て得たる道理の如く論斷すると雖も畢竟其結極の遂に一切真誠の學術に逆り、宗教の眞理を排し信仰を退くる常識常智に反せる空論たるのみ。故に如此き見解を執拗する學者は宗教と學術の兩立せざる所以、信仰と智識の並行すべからざる所以を主張して宗教、學術の關係を切斷し、遂に全世界の一切宗教を妄信教として之を排斥するに至る、妄見も亦た太甚しい哉。右の如き誤謬説を排斥するには敢て多言を要せざるべし、實に宗教に

學 哲 教 宗

章 二 第

(五二)

於て主とする信仰と學術に於て重しとする智識の關係は論者の誤解せるか如きものにあらず其の干繋は最密接にして分離すべからざるものなり。本來學術、宗教二者の本性はその基源を同ふせるものにして互に相隣離撞着するものに非ず、故に如何ある學術にもせよ深く其基本とする根底の學理を攻究するときには必ず信仰を根據として立論せる原理を見るなり。例へば物理學の分子論の如き、性理學の細胞原子の如き、地質學の地心火體の如き理論是れなり。學者輩はこの類の理論を以て實事の證據に因り推論せるものなりと信ずべけれど、其の事實たるや吾人の五管を以て實驗せるものに非ず、唯た漠然たる證據に因て或は此の如くならんと臆斷せる迄の論なれば、畢竟此の如くあるべしと信仰せるまでの事なり。これ則ち學術にも智力の外に尙ほ信仰力の必要ある一證なりとす。又た學者輩の自己の立案せる理論若くは著述せる書冊中諸論説の誤謬なるか將た實事に契合せる眞理あるかは



第 二 節

著者自ら判断して之を信仰せざる者は非ざるべし。以上は學術の上にも智識の外に信仰の必要なる所以を述べたり。今ま宗教の上にも亦た信仰の外に智識の必要ある事及び其關係の重要な事を論ぜんに、信仰に智識の關涉すると關涉せざるとに由て、眞誠の信仰と妄信との區別を生ずるものあり。則ち信仰と智力との發作相併行するときは妄信に反對せる所ろの眞誠なる信仰を生出するあり。故に唯た信仰のみ活動して智力の發作なきものは、皆な妄信たるを免れざるあり。例へば基督教に於て人智の得て達すべからざる天啓の教理を信仰するときは、先づ智識の慧眼を以て其の天啓教理とするものは、何が故に人智の得て達すべからざる乎を究め、始めて智力の得て及ばざるとを知り、終に信仰力に委して之を信ずるなり。これ即ち智識に伴ひたる信仰にして眞誠の信仰と稱すべきものなり。或は又た宗教の説く所の教理の理義如何を充分明かに確知し而して信仰すること、是

第 二 章

れ亦た眞誠の信仰なり。而してこれに反する信仰は悉皆無益の妄信にして智識ある人の好む所にあらざるなり。然らば則ち宗教心の先導者となるべきものは、確實ある智識をあらざるべからざるや明白なり。若し夫れ智識なくんば人間固有の宗教心は我を導いて愚迷の妄信に陥るべし。或は世間の神靈教に彷徨するを免かれざるなり。此の如く智識に伴はざる宗教心は終に人間をして生ながら墳塋中に閉鎖せしむるに至るべし。於是乎完全ある宗教心には完全なる智識の指導を必要とするあり。尙ほ第三章に於て更に詳説する所あらんとす。

○ 第 二 節

宗教と哲學の關係を論ず

宗教の學術に對する關係は、其學術にも多くの種類あれば、其種類に應じて其に對する關係も自ら同一に非ざるべし。宗教は道德學、哲學、心理學の如き學問に對して最も直接ある關係を有すれども、化學、地理學、特



第 三 節

に數學の如き抽象的の學術に對する關係は最も間接あるものとす。其の最も密接の關係を有するものは倫理道德の學是れあるべし。如何となれば凡そ宗教には深奥なる教理主義の一面と活潑ある勢力を有する實踐的主義の一面ありて、この間には道德を教へ之を實行せしむるか爲めの無形の能力あるに由る。實に宗教には教理と道德實踐の二大部門の糺合ありて人生目的の兩翼を成立するなり。如此く宗教は教理の部門と道德の部門とを結合せるものなり。然るに、今ま宗教を開發せんに教理部を少しも開發せしむるとなく、唯だ道德の部門のみを開發せしむるときは、宗教は殆ど道德學の如きものと變ず。則ち支那の孔孟教の如きは是か適例なり。特に宗教は理論を避て實踐實行の道を完全にするを以て目的と爲すものなれば、宗教中進歩の著しきものは、即ち道德なりとす。故に道德學と宗教とは最も密接ある關係を有するもの也。然るに世界の進歩人智の發達は宗教を學術的に進歩せしめ遂に論理の

第 二 章

法式に順應するの發達をささしめたり。去りて宗教の原理、宗教の定道の進歩變化をさせるに非ざるあり。更に別言すれば社會人智の開發進歩するにつれて宗教は證據的學術様の發達をさせりと雖も宗教の本體眞理の實體が、かゝる進歩をなせるに非ざるあり。而して其進歩も開發するや如何なる性質を帯び如何ある方向を取りたる乎を討ぬるに思辨的の性質を帯び形而上學の方向を取て進歩開發せるあり。即近世の神學なるものは是あり。元來神學の中には種々の種類ありと雖も、思辨的の性質を帯び形而上學の方向に進歩せる者は宗教哲學、神學の原理、自然神學及び唯理神學の如き則ち之あり。これ實に宗教と純正哲學とをとして密接なる關係あらしむるに至りたる所以なりとす。今哲學と宗教と類似の點を擧ぐれば、其理論の性質と論理の法則に於て類似し、其材料とする所のものに於て類似せり。全体哲學は眞理に非ずして唯た眞理を探究せん<sup>とす</sup>とする一の理學なり。而して哲學に於て究めんと



(〇三)

第 三 節

する眞理の眞善美の三眞理なり。この三眞理の本性を究め實性を探ぐらんとするは即ち哲學の目的なり。故に哲學の進歩は有限の人智を以て眞善美の眞理に達せんとするの進歩なれば、如何に進歩するも哲學は依然として哲學の羈絆を脱するを得ざるなり。これに由て之れを見れば吾人は如何に沈思黙考眞理の探究に努力するも之を盡窮し得べき期は永く來らざるべし。

然るにヘーゲル氏の哲學一たび世に現れてより、哲學の進歩して愈完全に趣くに從ひ宗教の性質を充分に帶るに至るを以て哲學は百尺竿頭更に一步を進め宗教と交代して人類の徳性を涵養するを得べしとの議論世に出てたり。この原種は詩家シルレル、ゲョテ、シロー、ルマー、ヘル諸氏の著書に依て漸く萌芽を發し、ヘーゲル氏の哲學に依て其莖幹を長じ、シタラウ、ス及びヘルバ、フ二氏の哲學に依て其枝葉を繁茂せり。されど此説は唯た枝葉を繁茂せるのみにして惜むらくは永生其果

第 二 章

(一三)

實を結ばざるなり。今ヘーゲル氏が宗教と哲學を同一視せる理論を略述して簡短に之を評論すべし。

ヘーゲル氏が哲學の重要なる部分の所謂「絶対觀念」の理論なり。氏曰く萬物の原因は「絶対の觀念」なり。眞實に存在する實躰は只た「絶対の觀念」あるのみなりと、又た氏の説に曰く「絶対の觀念」は永久に必然の要求に因て無限の變化をなし、其變化するや自由自覺ありて然るに非ず。盲突迷夢の間に必至の要求に依て變化するものなり。而して其變化せる結果の第一着は即現象世界是れあり。絶対之觀念開發して現像世界の物質となり、更に又た開發變化して植物とあり、動物と變じ、遂に人類に轉じて心意靈魂とあり、以て自覺自由を得るに至るなり。斯く人心に現化せる「絶対觀念」は人心に於て自覺を得、以て實有の自我とある。是「絶対觀念」開發の順序なり。然るにかく開發せる客觀的實在の萬物も自我も皆を轉滅逆轉して原始の「絶対の觀念」に還歸するもの也。此の如く「絶対觀



第 三 節

念啓發の目的の絶對の自覺を得るにあれど、其自覺を得るまでに三程度を經過せざるべからず。三程度といふ美術、宗教、哲學の三者是れなり。故に宗教の美術、哲學の中間に位する程度にして未だ眞智の自覺たる最上程度に達せざるも、更に進歩して哲學と成るときは、始て絶對觀念の目的たる絶對の自覺を得るに至るなり。由是觀之、宗教の未だ絶對の自覺を達し得ざるものなれば、哲學の下級に屬すべき程度なり。絶對觀念開發現化して哲學に達し自覺を得るは是れ同く宗教最後の目的なり。故に宗教若し今日の狀態に滯息して更に變化進歩する事なくんば、其終極の目的たる自覺を得るの程度に到達するを得ざるべし。則ち宗教は宗教たる所以の目的を達し得ざるなり。今日世に行はるる所の宗教は皆な形體具像的の宗教たるを免かれず。如何とあれば現今行はるる宗教は歴史奇蹟の如き信仰を根據とし、思想觀念の如き抽象思念を基礎とせざるか、故に重要ある思念の標準は思想の自由に非ずして、教

第 二 章

權、感情ありとす。元來宗教及び哲學は同一物なりと雖ども、宗教は猶ほ未開不完全の程度にありて、未だ哲學の程度に進歩せざるのみ。されど宗教はもと永く未開不完全の程度に澁滯して更に進歩せざるもの非ず。世界の進歩と共に具像的の宗教より抽象的の宗教に進み有形を脱して無形に入り、進歩開發して遂に純全たる宗教を作出するに至る。これ即ち宗教の進歩して哲學となり。哲學の宗教と交代する所以ありとす。

第一、ヘーゲル氏の宗教に對する見解は世間の最も見易き實事に相違せり。左に其要理を略論せん。

一、宗教には神學の如き哲學同様の教理部あるにもせよ、元來宗教の本



第 三 節

質本性は吾人に學問理論的の知識を與ふるものに非ず。ペーコン公の説の如く學問的の知識は皮相淺見の研究を脱して、實着深奥なる研究をなさば、或は人をして宗教の門戸に至らしむるや知るべからずと雖とも、唯た通常の學術或は哲學のみにては、決して吾人の宗教心を満足するの力なきを知るあり。故に碩學博識の士必ずしも宗教家たるに非ず。蓋世の哲學者として却て宗教に冷淡あるあり。之れに反し僻邑寒村の農夫にして尙ほ篤信敬虔の宗教者たるとは敢て珍奇の事にあらず。これらの事實を以て考ふるときは宗教と哲學の間に大なる差異の存するを知るべし。若しヘーゲル氏の説の如く宗教の本性は思想的のものにして宗教は其本性を哲學と同ふするものありせば何ぞ如此き反對せる實事の世に存する理あらんや。

二、今宗教的の知識と哲學的の知識とを比較するに、宗教に於て得る知識は哲學に於て得る知識と大に相異なるものあり。夫れ宗教の眞理は

第 二 章

多く信仰に依て解得すべきものなるを以て、之を智能に由り受得するものと云はんよりは、專ら意志の力に由て受得するものと云ふべきなり。素と人間は學術哲學の得て満足し能はざる眞理を渴望するもの也。而して此眞理の渴望を飽かしむる者は眞誠の宗教に外からざるなり。眞誠の宗教は人間の能力を以て發明發見すべからざる高尙蘊奥の眞理を含有するものあれば、之れに由て始めて満足するを得べきなり。故に哲學上の知識は人間の能力を以て達し得たる眞理にして、宗教上の知識は人間能力の得て達すべからざる眞理の啓示あるや明なり。三、前にも既に論述せる如く宗教は唯とり抽象虚形的の思想のみを以て成立するにあらず、有形具象的の性質を待て始めて宗教の眞相を創成するものあれば、一方には深奥なる無形の教理とありて現れ、他の方には最も有力にして最も活潑なる外儀禮式と現れ、而して宗教の神髓たる道德の實用を現出するものあり。故にこの點より宗教を観察す



節 三 第

るときは、道德脩身及び美術文藝に近接せるものあり。而して吾人の宗教に於て得んとする真理は、數學上の真理の如き抽象虚形の真理に非ず。又た思想の上のみに存する虚形の真理に非ず。唯た宗教に由て得んとする真理は、真理の實体なり。之を細論すれば、真理の實体を直接に觀視して、有限の靈魂(人)と無限の靈魂(神)との和合をなさしめんとするは、即ち宗教の終極目的なり。故に眞誠の宗教には、天然の外儀禮典なるもの存して人間が至上者に對する義務本分を完成するものなり。

第二、ヘーゲル氏の宗教に對する見解は、人間の何たるに關する普通の定論に反對せり。

ヘーゲル氏の説に由れば、宗教は思想的のものにして、哲學と異く抽象虚形の真理を以て體とするものなり。故に眞誠の宗教は、智力思想的のものにして、乃ち完全なる哲學ありと、然れどもヘーゲル氏若し人間の何者たるを忘却せずんば、かゝる説をなさざるべしと雖ども、氏は全く

章 二 第

人間の何ものたるを忘却して、理論にのみ偏せるなり。夫れ人間は、智力と思想のみを有するの動物に非ず。人智開發の目的のみ人間の目的に非ず。智力思想上の快樂のみ人間の快樂なるに非ず。重に感情意志の開發及び感情意志の快樂は、人生の目的の多分を占むるものなり。然るにヘーゲル氏の目的として懸望せる宗教は、感情意志を有せずして、唯た單に智力思想のみを以て生活する人間社會には適用するを得るならん。去れど吾人は不幸にして未だ曾てかゝる人間社會を發見せざるなり。

以上既にヘーゲル氏宗教論の批判を畢りたれば、是より哲學を以て宗教に代用せんとする理論を畧評せんとする也。

方今、或る學者の議論にヘーゲル氏の見解と五十歩百歩の徑庭こそあれ、同じく奇怪なる理論を主張するものあり。其問題を聞くに、宗教は哲學を以て代用するを得べきやとの問題なり。而してこの問題に對し、開



第 三 節

化せる人民の爲め特に學者の爲めには宗教の代りに哲學或は學術を代用せざるべからずとの議論最も盛なり。而して西洋の哲學及び學術或は東洋の佛教及び文學は唯り愚民のみならず學者にも眞理を教へ道德を完成せしむるに充分なりと論するは今日の學者の得意説なり。吾人は學術の効力又たは哲學の徳を如何に尊重するも、宗教に代用するの効徳ありといひ決して信ぜざるなり。吾人は彼の哲學は如何に進歩するも如何に完全するも、哲學變して宗教となり哲學を以て宗教に交代するを得べしとは信ぜざるあり。前段にも既に論述せる如く第一哲學は決して宗教的の眞理を吾人に教ゆるものに非ずと思ふ、之れ最も見易き道理なり左に二三の道理を擧て之を辨明せん。

一、哲學は吾人人間の爲めに必要欲くべからざる宗教上の眞理を教へ且つ之を確實不變なる眞理なりと確定するを得ざるあり。夫れ宗教上の重要なる眞理は「神及び人間に關するの眞理」「善徳の眞性」「罪惡の原因」

第 二 章

「世界の原因」の如き問題を闡明する所の道理にして夫の實驗觀察、歸納の法に因て得らるべき眞理に非ざるなり。故に最も進歩せる近世哲學に因るも此の宗教上の問題に對する確答を得る能はざるなり。實に堆積せる古今の哲學史はかゝる問題の解答を試みて其素志を遂げ得ざりし實證に過ぎざるなり。

二、「神實在者」「萬有之原」「徳義上罪惡之原因」「人間之目的」の如き眞理に係る問題の解答は、實驗觀察の學術は勿論、苦學の思辨に於ても爲し得べからざる事は既に前述の理論實事にて明白あるべし。今ま假りに哲學に於て眞實無謬の眞理なりと識得する場合あるにせよ、哲學者其人と雖ども、この眞理こそは永久不變の眞理なりと斷言するの士はよも非ざるべし。前段に論ぜる如く哲學は眞理に非ず、眞理を得るの理學にして、無限の進歩を爲さんとするものなり。然ども其進歩するや遅々として最も進歩の著しからざる理學なり。且つ哲學なるものは、完全眞理の



(〇四)

第 三 節

理想を以て目的として進歩するものなるも完全真理の理想は無限の雲外に在るを以て其目的を達するの期は無限の未來にあるべし。無智と罪惡を以て本性を破壊せる人間か、自己を以て自己を救ふ能はざる以上は、哲學も其結果として永く真理の堂奥に到達する能はざるべし。今哲學史の全脈を閱するに、哲學思想發生以來今日に至る迄、無數の哲學者陸續として輩出せるも、未だ一人の先輩の所論を贊翼して始終其所論を維持せる哲學者あるを知らざるあり。時に或は學派を組織して一主義を持するが如きものあるも、之れ表面の觀にして裏面に於ては決して一の主義を奉せし者に非ざるなり。所謂大同を以て結合し、小異を以て分離するものなり。故に一説出でて一説倒れ、一派現れて一派破れ、始終如斯くして興廢の歴史を永久に止るのみ、これ即ち哲學固有の一特性なりとす。既に世界に現れ出でたる哲學の有様及び結果は大畧如此くあるを以て、將來世に出る哲學も亦な推して知るべきのみ。由是

第 二 章

觀之哲學は到底萬國萬民か安心立命の基本たる宗教的の真理を確定するを得ざるべし。

三、或は又た哲學は時としてかゝる真理を發見し、哲學者輩の同意を得る事あるも、如何ぞ之れを全世界に蕃殖せる幾億万の人々に傳教普及するを得んや。蓋し哲學的の真理を識得せんには、哲學的の教育と開發を受けたる人に非ざれば識得するを得ざるものなり。然るに全世界の人民一樣に哲學的の教育を受け、思想を練磨して哲學的の真理を斷味し得る程に開化すべしとは想像するさへ尙ほ困難なれば、哲學上の真理を全人類に普及して宗教の如くあらしめんとするの妄想は決して實効を奏し得ざる事あり。

由是觀之宗教と哲學は相反對するものに非ずと雖、然とも又た同一なるにも非ずと云ふ事は自ら明了なるべし。これ乃ち宗教と哲學とは各特別なる性質あり特別なる目的ある所以なり。如此各自其の特性を有

第一級は 宗  
第二級は 教  
第三級は 哲  
第四級は 學

(一四)

此の如きは不可能に  
此の如きは不可能に



するものあれば宜しく其範圍を守り區域を脱せずして其本職を完ふせざるべからず。去れば眞誠の哲學と眞誠の宗教とは決して氷炭相容れざるものにあらずれば互に相調和して進歩を得べきあり。その哲學も宗教も進行の通路こそ異なれ等しく同一眞理に對て進み同く人生の最大幸福を目的とするものあればあり。

○第四節

宗教と美術の關係を論ず

宗教が人生に安心立命の眞理を教へて人性を高尙にし、道德倫理の基本を給して人生を完成するが如く、美術も亦た人性を高尙にし、道德を完全に趣かしむる性質を有するものあり。故に美術の性質を細密に攻究するときは、太た宗教の性質に類同近接せる性質を發見するを得べし。抑も美術の元精は雅美の感情是れなり、而して雅美の感情は最も複雑なる感情にして其知力に關係する所多きが故に、學術は勿論、哲學に

も關係を有するものなり。又た複雑感情は必ず意志に關係する所多きを以て、美術は道德にも亦た少なからざる關係を有するものなり。然るに宗教は哲學の原子も道德の原子も充分に含蓄せるものあれば、美術と宗教とは離るべからざる關係を有するや明瞭あり。之れを切言すれば、宗教の特性と美術の特性とは最も密接ある關係を有するものなり。夫れ宗教は具象の理想を以て目的とするものあるが故に、宗教の進歩開發の目的を云へば、具象の理想を標準として、人生を永久に進歩せしむるにあり。更に之を云へば、具象の理想を目的元塑として、日常の生活を高尙にし、完全に趣かしむるにあり。今ま美術の何たるを一方より觀察すれば、雅美の理想(象なり)を目的として、人性の根底に潜伏せる雅美の感情を開發し、調和整理して永久に進歩發達せしむるにあり。換言すれば、美妙の理想を目的として、日常の生活を高尙清潔にし、陋習を脱却して、天真爛漫の風姿を進歩せしむるにあり。これらの點より、宗教



第 四 節

と美術の關係を觀察するときには、實に類似せるのみならず、殆んど同一機之の如く見ゆれども、其實は二者の間に自然一髮の隔絶せる所ありて混淆同一に歸する能はざるなり。今先其類似せる彼是の點を擧ぐれば左の如くなるべし。

第一、美術の精神は既に前段にも論ぜし如く、雅美の感情に基ひするものなり、而して雅美の感情を感發せしむるものは、外界の萬有なりと雖ども、之を感ずるものは即ち内界心意作用中、雅美の感情なるを以て美術も亦た宗教と同一主觀的ありとす。故に雅美の感情に由て起る驢娛は宗教心の驢娛と一般に(一)高尚、深遠にして俗塵の外にあり、(二)清淨潔白にして不愉快ある事情の前後に發生すると無し、別言すれば劣等の願望貪欲の之に先發するとなく、壓倦飽足の之に繼續するところと(三)この雅美の感情に由て起る驢娛は主客の間、私意一身の關係を容れず。又たこの感情は、(四)同情の交換に依て大に深廣を加ふるものなり。例へ

第 二 章

ば万人が松島の絶景を眺め、日光の美觀を見て快とするが如きは、眞實なる雅美の感情なり。又た基督教の信徒は神天帝の絶對美妙を想像して互に無量の驢娛淨樂を感ずるか如きは、純全たる雅美の感情なりと云ふも敢て過言に非ざるべし。

右は雅美の心質の宗教心と類似せる二三の點を示せるものなるが、右の外にも亦た雅美感情の變體異種として見るべきものにして最も宗教心に類似せるものあり。

(一)宏壯、人造と天工とを問はず、絶大なる物形物象に對して起る感情なり。彼の巍峩たる山嶽を望み、渺茫たる蒼海を眺め、仰いて紺碧たる蒼穹を瞻、俯して翼然たる斷崖を瞰、或ひは霹靂、風雲、飛瀑、海嘯の怖るべく、驚くべき現象を觀て、心中に恐怖、不安の感情を誘起するに至る。この恐怖不安の感情よりして自己の微少、無力、昏迷の自覺を生じ、微少昏迷の感情起ると共に聯合作用の對比律に由て更に廣大、無邊と云ふ反對の感



(六四)

情を誘起するなり。正しく云へば自己の微少なるを思想するときには直に其反對ある無限大と云ふ思念を生ずるなり。

(二)又た覆載間の現像を知覺して、奧妙と云ふ感情を誘起する事あり。この奧妙感情は吾人をして自己の觀察せる事物の域外に未だ觀察せざる境界否か未だ觀察し能はざる境界の存すると云ふ事を自覺せしむるあり。然しなから吾人は自己の五官を以て事物の性質、事物の道理を發見するを得れども、元來觀察の達するを得る境界は、觀察の達し得ざる境界に比すれば其僅少あると恰も一滴水の蒼海に於けるか如く、極微のものたるや論なきなり。故に吾人の智識なるものは不明、不可解の牢獄を脱して満足無可疑の樂土に徘徊するを得ざるべし。この奧妙の感情に由て宗教心の開發する次第は後に詳論する所あるべし。この奧妙は唯たこの感情も雅美感情の一として宗教心の美術心と類似せるものたるを示すのみ。

第 四 節

第 二 章

(七四)

美術の精神たる雅美感情の宗教心に類似、近接せる如此夫れ大なり。然れども此に美術の性質に關して大に注目すべきものあり。凡そ天工人造の何れを論せず、雅美の性質を備具する事物は悉く吾人の感情を動かすに足るべし。而して吾人心意の狀態に變化を生ぜしときは其の物體は依然同一物體あるも、尙ほ多く斬新の感情を惹起するとあるなり。元來雅美物の性質に従て吾人の心中に誘起する感情にも種々の種類ありと雖も、天工の雅美物は、大抵一樣不變あるものなり。例へば山水花月の如きは、何れの國何れの時に於ても山水は即ち山水なり、花月は即ち花月なれども、人造の雅美物に至りては決して一樣不變あるものには非ず。時と所に由て大に變移するものなり。例へば西洋の書畫と東洋の書畫は其性質を異にし、古代の詩歌と今代の詩歌とは大に其體裁を異にせるあり。夫れ唯だ如此場所時代に由て異なるのみならず、同時代に於ても尙ほ美術家の性質に由て美術も亦た其性質を異にするが故に



第 四 節

美術の分類に至りては甚だ困難にして殆んど區別をなし能はざるを以て正當と認むべき分類なし、或は大別して東洋美術及び西洋美術の二種とするあり、或は太古美術及び近世美術の二種とするあり、或は西洋美術を更に小別して羅馬風及び希臘風とするあり、何れにせよ此等は皆研究の便利にせるのみにして、美術其物の性質上本來此の如き別區あるものに非ざるあり、今ま宗教と美術の干係を攻究せんとするには假りに美術を宗教的、美術、及び世俗的、美術の二類に區別するを以て最も便利なる方法なりとす。前段にも既に論ぜる如く人造美術は如何様にも變化するを得るものなれば、同一雅美物(例へば畫、歌の如きもの)にして或は宗教的の美術とあり或は世俗的の美術ともなるを得べし、世俗的の美術とは最も高等ある性質の事物より最下等の事物に至るまで今日生活上の爲にする家屋、器具の裝飾等凡て此世の事物を寫せる書畫、詩歌、或は演藝上の音樂、其他衣服衣紋の意匠等は皆な世俗

第 二 章

的のものにして神靈宗教的精神に乏しきものを云ふ、支那、日本の詩歌、書畫の如きは多く宗教的精神に乏しきものあり、雖然時に或は高尚清潔にして殆ど塵俗を脱せるか如きものなきにあらざり、詩經の如き即ち之れなり、詩經は支那太古の作なるべしと雖ども全く宗教的精神を有せざるものなり、これ古代の詩歌に於て稀れに見る所なり、去れど支那、日本の音樂中には多少宗教的精神を有するものなきに非ず、特に寺院の經鐘、日本神道の神樂、神葬祭の音樂及び和讃と稱ふる佛歌の如きは全く宗教的精神を有するものと云ふべし、然ども日蓮宗の祈禱に用ゆる大鼓の如きは宗教音樂の精神を有するものに非ざるあり、何れにせよ美術に於て宗教的精神の欠乏せるは東洋美術の一特質なりと云ふべし、世俗的美術の大半は甚だ卑淺に流れ易く動もすれば道義性を欠きたる感情に流れ、社會の風教を毒し不義不法を増長するの媒介となるものあり、我邦今日の詩歌、書畫、演藝、音樂、講談の如きは却て

支那、日本の音樂には多少宗教的精神を有するものなきに非ず、特に寺院の經鐘、日本神道の神樂、神葬祭の音樂及び和讃と稱ふる佛歌の如きは全く宗教的精神を有するものと云ふべし、然ども日蓮宗の祈禱に用ゆる大鼓の如きは宗教音樂の精神を有するものに非ざるあり、何れにせよ美術に於て宗教的精神の欠乏せるは東洋美術の一特質なりと云ふべし、世俗的美術の大半は甚だ卑淺に流れ易く動もすれば道義性を欠きたる感情に流れ、社會の風教を毒し不義不法を増長するの媒介となるものあり、我邦今日の詩歌、書畫、演藝、音樂、講談の如きは却て



第 四 節

風教を毒するもの多きを見るあり。  
然るに美術をして宗教的精神を含有せしめ、神靈的の發達をなさしむるときは、美術の品格益高尚に進み、宗教と密接の關係を有し遂に分離すべからざるに至るべきなり。眞誠高尚の美術は眞誠高尚の宗教と體合して發達するものあり。美術は宗教と密接ある關係を有するに至りて始めて宗教心を感發せしむるか爲めに莫大の効力を有するにあらべし。然り而して美術の最高尙なる性質及び潔白純清なる精神を發達せしめんには必ず宗教と結合せしめざるべからず。元來美術には美術の理想あり、宗教には宗教の理想あるものなれば各自目的性質を異にして發達進歩すべきものありと雖ども、彼是の理想は其元一にして二あるに非ず。唯だ同一理想の異面より發射せる異種の光線なれば斯く密接に相關係して發達進歩するを得るものなり。

〇 第五節

美術發生と宗教發生の關係を論ず

既に前節に於て論述せる如く美術と宗教は最も近接せる關係を有するものなり。然るに此の關係の甚だ密接せるより此に一條の問題起れり。即美術の發生發達は宗教に基源せしにあらざるなきやと云ふ問題はあり。

第 二 章

古今の宗教及び美術に關する歴史を閱するに最初美術の發生發達は宗教に基源せりと思はるゝ證據甚だ多し。最古美術の種類性質を視るに皆な譬喩的にして自ら宗教の精神を發表するものあり。蓋し人類固有の宗教心が外部に發表するや偶然に發表すべきものに非ざれば、これを發表するの機會を要するなり。假令ば人其の心事を他人に傳へんとするに當り、感情の切迫急激なるときに於て其の感情を代表するに相應せる言語の順に出でざる事あれば、必ず手足の運動、身軀の容姿、顔面の變動等何れも其感情に直接ある身軀の運動に發表せんとするの



(二五)

節 五 第

勢あるなり。如斯く人間は深奥熱切ある宗教心を發表せんとするに、若し言語か其の感情に相應せざるときは必ず表號と容儀との譬喩に由て宗教心を發表せざらざらざるなり。殊に言語の不充分なる原人に至りては最も太甚しければこの表號、容儀、譬喩あるものは未開の原人に於て最も必要なる無聲の言語あり、されば未開の蠻民は熱切なる宗教心を發表せんとするに當り言語の不充分不完全ありしより、必ずこの表號、容儀を以て宗教の感情を發漏せしや疑ひあし。故に古代の宗教を見るに一として表號、容儀を有せざるはなかりしなり、其後社會は倍進歩するに従ひ言語も共に進化せしか表號、容儀は遂に宗教上の教儀、禮典と成れり。此の如く人間は無形の思念を有形の摸様に發表する第一着として先づ宗教心を美術に發現せしめたり。故に如何なる未開の蠻民にも宗教存すれば必ず多少の儀式を見るを得るあり。假令野蠻蠢愚の甚だしき居るに室なく、食に蕪なき原人と雖其宗教の性質に幾分

章 二 第

(三五)

か儀式の存せざるはなしと雖とも今日の如き高尚なる儀式と同じからざるや明かなり。

或人曰く美術は其發生すべき獨立の原因を有するものあれば宗教心の要求にのみ由て發生するものに非ず、多くは雅美觀念に由て發生するものあれば必ずしも宗教の範圍内に網羅せらるゝものに非ずと今ま姑らく此の理論を容れて考ふるも、一切美術と一切宗教は其古代に於て互に密接なる關係を有し彼是相補益して進歩せるものなりと云ふ事實を排撃するに能はざるべし。特に古代の詩歌、書畫、音樂彫刻等の如きものゝ發生の何時も宗教心の刺衝に由て發現せしにあらざや。

畢竟人性には美術、宗教の二觀念相獨立して存在するものなれども、一觀念の外部に發表せんとするや必ず他の觀念を伴て發表するものなり。夫の原人は記憶に乏しく感情と感覺にのみ支配せらるゝ事多ければ、感覺感情の爲めに宗教心を蚕食せられて下等動物と異なるなき時



第 五 節

もあつるべし。されど宗教心をして再び萌芽を發せしむるも亦た感情、感覺を以て媒介とするものあり。而して宗教心を發生せしむるに足る感覺、感情中には自ら雅美の精神を帶ぶるものあるべし。則ち綠蒼たる森林の美觀、晃々たる朝暎の雅景、洒瀟たる廣野の風光等皆な原人の心をして平和の海に沐浴せしめ、遂に冥々の裡に神と云ふ觀念を廻想せしむる事あるべし。斯かる心象は美術の思念に宗教心の伴生せるものありと思はる。電雷將に躍らんとするや油然たる黒雲盛に起り、迅風砂礫を撒き四面慘憺として最も怖るべき異觀を呈するあらん。若し原人をしてかゝる現象を見せしめば直に鬼神の憤怒せるなりと思ひ大に怖れ慄くべし。一旦忽然として雨止み風靜まり雲間より暉々たる光線を發射して萬物を照し、又天の一方に虹霓の畫然たる奇觀を見るたび毎に原人の心は怡々乎として快樂を覺へ、遂に宗教心を誘起する事あらば、後には雅美物を見る毎に宗教心の幾分を廻想するに至るべし。此の

第 二 章

如く連合作用に由て觀念と觀念を密接に結合するものなれば感情進み知識開るにつれて、宗教と美術の密接なる關係を生ずるに至るなり。傳記に依て見るに古代の詩家及び彫刻者の神の默示を得たる者と名けられたる事あり、例へばソローキ古代の詩家は、神の學者と名けられ、ホーメルは神の詩家と稱せられたり。デモシット、プラトンの如き哲學者と雖ども神の默示なくんば詩歌を詠すると能はずと云ふ妄信を懷けり。コラッソと云ふ詩家或時言をあして曰く、ヘテ神は默示に由て我に詩作の術及び詩家の名稱さへ給へりと、此等の實事に由り古代に於ては宗教と美術は如何に密接なる關係を有せるやを知るべきなり。然り而して今此の宗教心の開發力と美術心の開發力との強弱を比較するに歴史の證するか如く宗教心は最も強勢力を有する心なれば、美術の心は強力なる信仰心の領する所となるや疑ふも、果して然らば古代の美術は宗教の胸懷に生長せる事は自ら明了なるべし。



第 六 節

○第六節

美術と宗教との關係は互に相反せる關係に非ず

以上の二節に於ては美術宗教の性質と發達との有様を論じて美術宗教二者の關係を正面より論述せり。然るに宗教と美術の關係に對して二様の反對説を主張する者あれば、今ま之を批評して反面より宗教美術の關係何如を論究すべし。余は左の順序に由て之を評論せん。此節には宗教と美術は反對せる性質を有するものなりと云ふ理論を評論し第七節に於て宗教と美術は同一なりと主張する理論を批評すべし。併てこの節に於て論評せんとする理論は、宗教と美術は相反せる性質を有するものなれば、之を組合する事を得ざるのみならず、互に反對して氷炭相容ざるの勢を有するものなりと云ふ理論なり。この理論は中古、回々教の神學者及び諾斯士教派の二元論者の説に出て、近世に至りロック、ハルトマン等の諸氏が主張せる理論あり。この説に同意する學

第 二 章

者輩も少なきに非ざれども、吾人はこの理論の主唱者が平素懐抱する理論の主義如何を見るのみにて、何故に論者は斯る説をあすに至りたるやを知るに難からざるなり。今其誤謬の根本を明言すれば、宗教の性質を驗査して宗教の何たるを定るに當り、宗教の眞意を誤解し遂に偏見に陥りたる事是なり。讀者試に回々教の淡泊無味なる一神教の教義を見よ。唯た美術の一分部たる彫刻術を除くの外、一切の美術を排斥して人間動物の像を制するは皆ち宗教の精神に反對するものとなせり。又た二元論を主張せる諾斯士教徒は物質物體を以て罪惡の原因、出所となせるか故にこの物質物體を以て制作する彫刻繪畫等の美術も亦た同く罪惡の原因なりとして之を排斥せり。特に美術に對して右と同様なる偏見を執て美術を滅亡せんと試みたる徒は八世期頃に起りたる基督教の聖像排斥者なり。彼輩は美術的の物を宗教の奉神禮に用ゆるの非を辨ぜんとして、其極端に走り遂に畫家をして殘酷なる窘逐の



第 六 節

若楚を嘗めしむるに至れり。去れど如斯き徒の主張する理論は其根基とする所は一も論辨する價值なき謬論なるを以て言細々しく辨難するを要せざるべし。かゝる誤謬の起るは前にも論ぜる如く、宗教と云ふもの、眞意を誤解せる事是なり。最高尙なる宗教は最高尙なる美術と體合するものなれば、基督教は最高尙なる美術と體合して其眞理を表證するものなり。則ち基督は無形神靈の「道」と有形實體の「人」と美妙に體合せ、神人なり。美妙の高尙、尊榮は基督に依て顯現せり。更に別言すれば、無形の靈は有形の「軀」と結合し、無形の「美妙」は有形の「美妙」と結合して高尙完全なる「美妙」の理想元型となれり。吾人は先きに東洋の美術を評して宗教の精神を欠乏せるものありと云ひたれど、今支那「孔」「孟」教の教理に附て、東洋美術の高尙ある程度を明言すれば、支那の「孔」「孟」教は既に眞理と美術の調和結合を圖りて、道德の哲理を立てたるものなれば、實に東洋に於ける基督教の前驅と云ふべきものなり。孔孟教の教義は「道」と

第 二 章

「文」の中庸結合、即ち二者の完全調和を説きたるものあり。文は道の章あり。文質彬彬の語の如きは實に美術の精神を曉知せる者に非ずんば、言ふ能はざるの名言なり。古代より支那人は文藝を以て道德と同様に尊重せり。文藝は即技術にして美術と同じきあり。之を細論すれば、文は即美なり。藝は即術あり。故に文と藝と道の三者の奧妙を得て三者完全の調和を兼ねたる者は即ち聖人あり。これ人間勤學の目的あり。これ聖門哲理の高尙ある所以あり。然れども支那戰國時代の野蠻風はこの文藝と云ふもの、中に馬術、弓術の如き武藝を合せて文武の道とせり。然れども之を以て美術の精神を失ひたるものとなすべからず。只た無形の「道」と云ふものより遠隔せるに過ぎざるのみ。元來宗教の性質は純乎として純なる事恰も黄金の如きものなれば、如何なる美術をも抱合するを得べしと雖ども、既に前節に於て論述せる如く、宗教的の開發をなしたる美術のみ自然に宗教と抱合するに至るなり。



第 六 節

故に抱合せる美術の性質如何に由て其宗教の性質如何を知るを得べし。宗教の内部に存する美術は自然其外部に顯るゝものなれば實に美術の宗教の内心を表する外貌とも云べきものなり。

○第七節

美術と宗教ハ同一の關係に非ざるを論ず

既に論述せる如く吾人は宗教と美術は密接なる關係を有して分離すべからざるものなるを信ずると雖ども宗教を以て單に雅美の感情の表顯なる美術と同一視するの理論に同意するを得ざるなり。宗教と美術を同一視せる論者の誰たる、及び其見解の如何を一言せん。本章第三節に於て宗教哲學の關係を論ぜる部にも既に論述せる如くセルリンク氏起て宗教を哲學上より解釋し宗教の性質を誤解せる事は識者の普く知る所あるが、其哲學は即宗教美術の關係を誤解せる根本となりたるものあり。

第 二 章

其哲理を大成するに預りて大に力ありし者はセルマンセルマン蓋世の詩家シンク遂に宗教と美術を混同するに至りたるものあり。次にシクラウス氏の如き曹輩出して宗教不可信説を唱へ美術を以て宗教に代用せんとする理論を主張せるなり。吾人如此説に向て一々論辨するを欲せずと雖ども此に少しく宗教の美術に秀越せる二三の性質を擧て略論する所あらんとす。(一)其性質上に於て、(二)主眼とする者に於て、(三)吾人の生活上に對する影響に於て、(四)吾人の道德上の關係に於て彼是の間に大に異なる所あり。

或る論者の説に由れば宗教と美術の間に大なる差異の存する所以は、宗教は美術に比すれば遙かに神靈的(無形と)あるにありと。今其所論を聞くに美術と云ふ語の本は感覺と云ふ語に出で全く有形物のみ屬するものを云ふものなれば無形的の宗教に比するときは甚だ物質



第 七 節

的に近接せるものなりと。然とも吾人は心理學上の實事を考ふるに、雅美の感情を以て未だ必ずしも物質的なりと斷言するを得ざるなり。却て吾人は無形的に近きを見るなり。夫れ美術の目的主眼とする所は、雅美之觀念なり。而してこの觀念の原素を成立するものは何ぞやと云ふに、「有智の意匠」「前後の統同」「左右の調和」若しくはこの種類の變態なりとす。吾人は外物に感して雅美の感情を誘起すると雖とも、是れ我が心中既に雅美の觀念ありて美を美とするの心あるに由るものなり。美術の殆んど神靈的に高尚ある點を云へば、人々の性質を美なりと云ふ時は其人の徳性の美なるを指す事是なり。而して人の徳性は純然たる無象の心性あり、既に數々論ぜし如く美術の原素をなすものは一般に「美妙之觀念」是なり。これ無形無象の心性に外あらざるなり。知るべし美術は決して物質的のものゝみに非ざる事を。

一概に「美妙」「雅美」と云へば譯もなき語の如くなれど、「美」と云ふ問題は哲

第 二 章

學上最も難澁なる一問題なり。故にこの「美」と云ふ問題に關しては、哲學者各其説を異にして今日に到るも尙ほ其確答を得ず。プラトンの説に由れば、「美妙」は天上の「本源美妙」の反影にして吾人はこの反影なる地上の「美」を觀て不知不識其思想を美妙理想の境界に遊ばしむるに至る者ありと。アリストテールの論に由れば、「美妙」は即ち或る物體の全部の上に存する秩序調和に過ぎずと。ライアニツ及び數學者一般の説に由れば、「美妙」は數學的の計算幾何學的の測量に基く物體の大小遠近の參差なりと。ヘーゲルの説に由れば、觀念(無形)の本性に相應せる形體(有形)を受けたる者は即ち「美妙」也と。諸觀念中に存する或る一觀念が有形と現化して「美妙」となりたりとの説なり。如此「美妙」の眞性如何に關する理論は百出百異なりとは云ひこゝに何人たりとも左袒せざるを得ざる一點あり。即「美妙」の眞性は如何に、眞理、至善、律度、端正の如きものに近接類似せるも、是等のものと「美妙」なるものは全く別異なる性質を有するもの



(四六)

なりと云ふ確論是れなり。抑も美妙なるものは眞理、至善等のものなくんば獨立の存在をなすと能はずと雖ども、眞理、至善の如きは假令「美妙」の之れに隨伴せざるも、其存在に不都合を生ぜざるなり。特に律度、端正の如きは通常の美妙を欠くも、尙ほ存在するとあり。然ども人間行狀の上、「美妙」あらしめんには、必ず律度、端正ある行狀かかるとべからず。宗教に於て要求する所の感情を心理學上より論ずるときは、吾人に「無限存在」と云ふ者に對する感情を與ふるを以て他の感情とは大に別異なる所あり。又た宗教の感情は雅美の感情と異ありて唯たに万物の美麗なる事、人心作用の律度、調和ある事を美として感賞するのみならず、必ずこの美妙、この律度の原因を探究し、其原因なる万有の造成者を觀念して是に尊敬を表するに至る也。されど吾人は一切の美術工藝品は必ずしも宗教の感情を誘起すると云ふに非ず。蓋し前節に於て既に論述せるが如く、高尚なる美術工藝品にして尙ほ宗教的の性質を欠くも

第 七 節

第 二 章

(五六)

のある事あればなり。而して宗教感情を誘起するに最も適合せる美術品は形而上即ち無形上の事情を以て材料とせるもの是れなり。特に宗教的の歴史に屬する詩歌、讚美歌、畫像の如きは宗教心を喚起するの勢力あるものなり。今や宗教心と美術心の上に存する根本の差別を明言すれば、彼此共に理想を以て標準とするものなれど、雅美の感情は理想界に屬する想像上の雅美を探求するに止ると雖ども、宗教心は之に反して、至美完全之元型「美妙」の原因者なる神と直接に交通せんと欲するなり。美術は理想界を畫き出してミルトン氏に「樂園失亡」の想像をささしむべし、去れど宗教は想像のみにして止むものに非ず。樂園失亡の實確あるを證し既に失亡せる樂園を再び得るの道を教ゆるものなり。故に美術は唯た事物の想像にして宗教は事實の眞確を信仰するもの也。諸て是より宗教と美術か吾人の道德上に及ぼす影響の勢力如何を論じて彼此の特異ある性質を探究せんとするあり。讀者は予が以上論述



(六六)

第 七 節

せる所に由て考へたらんには、美術の最も高尚なる事、美術の道德に及ぼす影響如何を知るに足るべし。されど吾人はこれを以て美術の直接なる結果なり影響ありとあすべからず。美術の直接なる結果は吾人の雅美の感情を満足するよあり。美術家の常言に曰く、雅美の感情は即美術の目的なりと。然れども宗教の目的はこれに反して吾人の道德を完成し、吾人の道德をして無限に高尚ならしめんとするにあり。故に宗教には一定の教典律法ありて之を各人に實行せしめんとする最強の權勢を持つるなり。由是觀之、宗教及び道德の實力の美術の實力に比すれば、高尚にして且つ有力なりとす。

美術の道德に影響する勢力を理論上より見るときは必ず廣大なる勢力を有せざるべからざる道理なれど、歴史上實事の證する所は其に反せり。試にグロリーキの古史を繙き美術の最も盛なりし時代を見よ。徳義の狀跡果して如何や。貴族平民擧て徳義を亂し、風俗を壞りたるも美

第 二 章

(七六)

術の未だ發達せざる時代よりも甚たしき有様を呈したるに非ずや。羅馬史の證する所も亦た然り。羅馬美術の盛代は即徳義の衰頽せる時代なりし。又た吾人の觀察する所に由るも、美術藝能に熟達せる人は必ずしも道德の君子にあらず。醫者の不養生、音樂者の不品行は世に多き實例あるべし。此の論を結ぶに臨て一言せざるべからざるものあり。抑も美術なるものは雅美の感情を飽かしむるに足るも、心靈上の平安を得せしめ、良心の安寧を得せしむるに足らざるあり。美術は吾人の生命に關する問題を解答する能はざるは勿論、人生の最も單純なる疑問と雖ども又た美術の解答し得る所に非ざるあり。况や良心を宥恕して道德を堅立するか如きに至ては、美術の勢力の及ぶ所に非ざるなり。シメラウス氏美術を以て宗教に代用せんとするは果して何事ぞや。

○ 第八節

宗教、道德の關係を論ず



節 八 第

本節に於ては宗教道德の關係を論述せん、抑も宗教道德二者の關係は原因結果の關係として見るべきものに非ず、如何となれば宗教は道德の原因に非ず、道德は宗教の結果に非ず、二者共に獨立の性質を有して而も互に分離すべからざる本性を有するものあり、又た宗教道德の關係は階級上の關係として見るべきものに非ず、如何となれば宗教は道德に比して上級に位するものに非ず、道德は宗教に比して下級に位するものに非ず、故に二者の關係は事物の上下の關係に非ざるなり、然れどもペイン、スペンセル其他二三倫理家の説に由れば、宗教は無實の妄信なれば天地間の理法たる道德の上に位すべきものに非ず、と、其に反して宗教を重む道德を輕視する所の學者もあきにあらず、昔時プロテスタント教徒起りて宗教改革説を唱ふるや、宗教と道德の關係を解釋じて道德は信仰即宗教に比すれば一段下位に立べきものなりとせり、彼の徒は如何して斯る説を唱へたるかと云ふに、人間の救贖は德行

章 二 第

に由て成就するに非ず、唯だ信仰に由て成就するを得べき也と云ふ一派の定理を立て吾人々類の救贖は唯だ信仰に由て成就するを得べしと論ぜるなり、去れば舊時の「プロテスタント」教徒は道德を輕じて信仰のみを重む種々の弊害を生ぜしめたり、吾人又た十六世紀頃の歴史に於て見るに「アンテノミスト」反法者なる者起りて彼の「プロテスタント」主義を一步進め説をなして曰く善行も徳業も救贖の爲めに必要なるものに非ずと、彼の徒は正教會の信仰個條に「人の信と行に由らざれば救を得る能はず」と記せる名文を以て、救世主の功德を無にせんとする者なりと云へり、如此説の社會に對する宗教の位置を高からしむる能はざるのみならず、宗教の價值を損じ社會人心を害するや大なり、舊時の「プロテスタント」教徒の義論過激に走り、唯だ信仰のみを重むて道德を輕ずるの氣風を増長せるにも係らず、如何なる原因にや「プロテスタント」教徒中より其説に全く反對説を唱ふる者出でたり、カントヒ



第 八 節

「プロテスタント」以來の日耳曼哲學者是れなり、彼の徒ハ「プロテスタント」教徒に反對して、道德之觀念ハ唯一最上の觀念にして、宗教の觀念ハ第二段の地位ヲ立ベキ觀念ナリ」と主張せり。これ「プロテスタント」教より起りたる「プロテスタント」の關係ハ「プロテスタント」の關係ニ存する重要なる關係ハ「プロテスタント」の關係ニ於て一方の發作ハ他方の發作に影響し互に相補け相益する密接なる關係を云ふあり。宗教、道德の二者ハ最も密接なる關係を有し論理上に於てハ二者の關係を分離し得るも、其實際に於てハ決して分離すべからざる性質を有するものなり。其密接なる關係を一言すれば、若し道德ハ宗教上の精神を有せずんば、決して完全眞誠の道德とは云ふべからず、又た實力功績の上に於ても決して道德の本分を全ふし得べきに非ざるあり。若し宗教にして道德の精神實力を兼有せずんば、完全眞誠の宗教とは云ふべからざるあり。故に道德を排して

第 二 章

宗教のみを立てんとするが如きも、宗教を排斥して道德の一方を維持せんとするが如きも、二者の本性如何を知らざる者にして、二者の間に存する自然の順序を破らんとする沙汰のみ、古今の歴史に徴するときハ、道德、宗教の實に密接なる關係を有して分離すべからざるを明むべし。此等歴史の例證する所にして誤りあくんば、道德、宗教の密接なる關係ハ社會の盛衰に大なる影響を有するものたるを知るなり。如何となれば、宗教若し尊貴を失ふて社會に活動するの勢力あからんか、この社會の道德も同く衰頽して、宗教と同一ある有様を呈するに至るべし。故に宗教、道德の二者ハ、共働補益の密接なる關係を有するものあるや疑ふべからざる事實あり。宗教若し正當の道德を兼有せずんば、是れ實に菓實を結ばざる樹木に異ならざるべし。道德若し正當の宗教に基ひせずんば、所謂蟠根を切斷したる樹木に異ならざるべし。故に古來道德を説き倫理を論ずるもの必ず先づ道德の原理を立て根本を確定するを



第 八 節

以て徳義教化の第一着とずるなり。而して其原理を立て根本を確定するや必ず宗教的の原理を以てせり。

以上論述せる如く宗教、道德の二者の最も親密なる關係を有する者なり。故に動もすれば二者の間に存する差異の點を發見する能はずして二者を同一視するに至る。而して宗教、道德の二者を混合同一視するもの勢ひ宗教の自立を排じ、道德の獨立を失ひしめ、唯だ其差異の外部に止りて内部性質に非ざると論ずるに至るなり。然ども宗教、道德二者の關係の決して此の如きもの非ず。然り而して、分離すべからずと云ふ事の「同一あり」と云ふ事と大に異なるものなり。故に彼是の關係の密接にして分離すべからずと云ふ事を以て彼是の同一ありと云ふを得ざるべし。如此宗教、道德の二者の互の効用、實益上に於て密接なる關係を有するのみにして其本性の同一あるに非ざるなり。故に吾人の深く此の二者の間に存する差異を考究せざるべからず。差異とい何ぞや、曰

第 二 章

(一)心理上の差異、(二)客觀物の差異、(三)資質上の差異是れなり。道德に於て要する心意上の作用の「道德の感情」及び「道德義務の心」之なり。この理の第四章第四節に於て詳論すべし。而して道德の目的とする所、道德進歩の標準とする所の「至善の觀念」なりとす。然るに宗教の要求する心意作用の智力或は感情の一二に止るに非て、「全心全意」を擧げて宗教の關係する所とあるものなり。又た宗教の目的とし、標準とする所の「無限の觀念」是れなり。吾人の道德心の唯だ自然の道德法に一致して發作するのみならず、吾人の全心を制御すべき勢力を有せる宗教心の要求に順じて發作するものなり。道德心の勢ひ宗教心の要求に従ひざるを得ざるものなれば、遂に道德も自然宗教の性質を帯び即ち宗教的の道德と稱するものを生ずるに至るあり。是れ道德の最も高尚にして、最完全なるものあり。



第 一 節

第二章第二節及び第三節に於ては、宗教と學術及び哲學の關係を別々に論述して、宗教の本性を考究せり、本章に於ては、宗教、學術、哲學の三者の相互の關係を論述して、宗教の本性及び哲學、學術二者の本性如何を考究せんとするもの也。

○ 第一節

眞理と人智の關係を論ず。

夫れ眞理とは何ぞや、何をか眞理と爲すべきや、吾人々類は眞理を渴望して止まざるものなれど、吾人の渴望する眞理は吾人の知得すべきものある乎、若し眞理は果して知るを得べきものなりとせば、如何して眞理を知るを得べきや、那邊に眞理を發見すべきや、これ古來論究せる所の大問題なり。此に於てか無數の異說陸續として起り、議論百出、結んで解けざる此に數千年、西は希臘古代羅馬盛時の宗教、哲學より近世理學大成の全歐洲の今時に至る迄、東は印度大古の宗教、理學競争の時代、支那

第 三 章

の無爲教化の神統時代より、東洋今日の佛教の末世、儒道の自滅時代に至る迄、無數の理學者、哲學者四方に起り、無量數千の僧儒古今に出で、甲論乙駁、唯だに筆戰舌闘の如き平和の手斷を用ゐたるのみならず、度々干戈に血塗る事さへ東西に多かりし。かゝる爭論の間に、恰も金石擲して火光を閃發するが如く、間々眞理の微光を發せざりしに非ずと雖も、直に黒雲の障蔽する所となり、眞理は遠く人界より其踪跡を絶するに至れり。今を去る一千八百有餘年前、基督教主猶太國に於て、羅馬の法應に立て審問せられし時、方伯彼拉多彼に問て曰く、眞理とは何ぞやと、然れども其答を待たずして獄を決せり。其後將に二千年に近き歲月を経たるも、未だ其答を得ず、怖らくは今後と雖も其答を得る不能るべし。

嗟實に人間は眞理の天堂より墮落せり、眞理は實に人界を去て遠く雲上に在り。然れども人間の眞理を渴望するの甚だしき遂に肉身を殺し、心



第 一 節

魂を滅するも、墮落せる天堂に再び登上せんとするに至る。或は宗教哲學の嚴肅主義に於て、或は佛教の寂靜涅槃に於て、彼は肉身の桎梏を去て心靈を真理の天堂に登さんとし、是の身心共に轉變せしめて無量莫大の眞如の大海に成佛せんとする等也。然ども天に登らんとする和比偏の天梯高塔は、立つるとして崩壊せざるなく、起るとして破れざるなし。夫れ人間の智力は有限有量あり、有限有量なるが故に脱す可らざる法則範圍あるなり。然ども人間の元祖は智識を得んとするの傲慢より遂に人道を破り樂園を亡ふたる如く、吾人一切の人間も傲慢にして、正當なる智識の範圍を守らず、法則に従はざる故、真理の神命は、かゝる者の理論思想を絶滅に歸せんとするなり。即智識の範圍を守らず、法則に従はざる理論思想は自ら撞着して自滅せんとするなり。然ども眞理は人間心靈の食物あれば誰か之を食ふを欲せざる者あらんや、之を食ふ事を欲せざる者は、即ち懷疑論者あるのみ。萬人皆ち眞理の食を得ん

第 三 章

とする渴望を有するなり。且つ夫れ眞理は人間生存の一大根本ある故、眞理なくんば人間の存在も、虚無に歸すべく、人間の智識も虚物にならんとす。故に眞理は必ず存在するものにして、必ず人智の知り得べきものたるや明かなり。然ども其眞理を發見せんとして、數々誤謬に陥り、迷路に彷徨して、一物をも不得して終るもの幾千萬なるを知らず。ゼノフ、テスの語に、吾人の精神は常に俗間の欲望を以つて、上天の神宮に登上せんとする者なりと、これ正しく人間の本望を寫せる語なり。去れどバスカル冷語を吐き、人智の迷妄を責て曰く、人間は眞理の藏庫たるかと思へば、誤謬の住所たり、善徳の寶藏たるかと思へば、罪惡の原泉なりと。實に人間は誤謬、罪惡を以て満てたる器物たり。實に人世の歴史は思想の誤謬を以て經となし、行爲の罪惡を以て其緯となして、織りなせる織物なり。然らば則ち眞理は人間の發見し得べきものに非ざる乎。決して然らざるべし。吾人々類は眞理の爲に存じ、眞理を以て目的とするもの



(八七)

第 一 節

なり、故に吾人は眞理を知り眞理を得て世界に生存し、眞理を得て始て眞誠の幸福に達するものなり。然とも吾人これに加へて云ふんとす、吾人に眞理を識得するの能あるとを、懷疑學者に非ざるよりの、何人も疑議する所に非ざるべしと雖とも、吾人の智力の有限有量有量有量なるが故に知識に守るべき範圍あり、犯すべからざる制限ありて、眞理の唯だ思想と智識の範圍制限を守るに現存し、而して其範圍制限を超越するに由て、直に虚偽となりて絶滅し去る也。

人間の智識の如何又靈妙なるも、如何に高尚なるも、元來有限有量の智識あり、之を反して、眞理の無限無量圓滿完全の存在たり、何とて人智の能く包羅すべき處ならんや、有限尺度を以て、無限尺度を測定せんとするも、豈に得べけんや、且つ人智の有量なるが故に守るべき範圍あり、有限なるが故に犯すべからざるの制限あり、この範圍制限を脱するとき、即虚無あるのみ、教授ポウイン氏語あり、曰く吾人の能力の正當なる

範圍を守るとき、苟も吾人の知らん事を要する事物を悉く知るを得べしと。

○ 第二節

眞理と哲學、宗教、學術三者の關係を論ず。

第 三 章

(九七)

哲學上人智の何ものたるを論ずるに種々の説あり、或は曰く智識の感覺の簇會なるが故に吾人の識得する知識は只だ觀察經驗の範圍に限る。と或は曰く、吾人の智識に本然の智識あるが故に經驗以上の道理をも識得するを得る。と或は又曰く、人智には本然の觀念存すと雖とも、是れ唯だ知識の形式のみなれば、人智は經驗感覺の外に知得する所あり。と吾人はこれらの理論を細述するを欲せず、又た之を批評するを不欲るなり。去れど人智を以て如何なるものとなすも、前にも論ぜる如く、懷疑論者よあらざるよりは、何人と雖とも、凡そ眞理を知らんと欲する者の承認せざるを得ざる所の理論あり、即ち吾人の知識を以て眞理



第 二 節

を識得するの能力ありと假定すべき事是れあり。吾人は實に真理を識得するを得べし。如何とあれば、真理は學術進歩の全體の目的、宗教一般の完全理想を成立する者なり。又た、哲學總體の終極の目的、唯一の標準あり。更に別言すれば、真理は實に人生根本の目的なり。故に真理は純全虚形の抽象的概念に非ず、純全無形の實態なり。道義の目的、果して何ぞや、終極の善なる乎、曰終極の善、即真理あり。美術の目的、何ぞや、美妙の理想なる乎、美妙の理想、即真理なり。完全の善徳、完全の美妙、皆な真理の異名あり。故に真理は無限無量の完全體にして、善徳、美妙、一切原善を包括するものなり。一切人智の發生發育等、この真理を以て目的とするものなり。然ども既に論せる如く、人智は有聖礙なるが故に無限無量の真理を悉く識得し盡すべき者に非ず、人智の能くする所の、唯だ真理の一部分を知り得るに限るのみ。真理は猶ほ大洋の如し、人智の能く汲得する所の渺たる滄海の一滴のみ。故に人間の推測式を以て

第 三 章

無限真理を推理するを得べしと思想するは、是れ恰も人智を無限智識ありと思想するに異ならず。神學者グロコイ曰く、若し無限を思想概念せんとするものあらば、是れ無限を制限せんとする者に異ならず。蓋概念すると云ふ事は制限すると云ふことと相均しければありと。故に吾人の心意は如何に聰明なるも、如何に鋭敏なるも、又た如何に廣大なるにもせよ、真理を直接に識得するを能くするものに非ず。真理其ものを其實態のままに知り得べきに非ず。真理は人心に入りて人の知る所とならんが爲めには、完全真理の實態も人心固有の性癖形質に相應する様に變容せざるべからず。真理は人間の直接に視得べきものに非ざるが故に、真理は人間の要求、人智の状態、世界の事物等に於て種々の状態を以て現れざるべからず。更に別言すれば、真理は吾人の智識に入らんが爲めに吾人の智識の性質及び程度に従ひ相異なる様を以て現るべきものなり。而して真理の人間に達するの道に三大道ありとす。



(二八)

この三大道は即ち人心の狀態要求に應じて現れたる者にして、所謂三大道とは「宗教」「學術」「哲學」の三者是れなり。この三大道の外に眞理に達する道は斷然なきあり。實にこの三大道こそ眞理の堂奥に入る唯一の門戸なれ。而して又た眞理は人間幸福の本源なるが故に、吾人若し人間の最大幸福を得んと欲せば、この三大道を合せ進まざるべからず。然るにこの三大道各一には必ず眞偽の二反對あり。即ち此二反對は眞理。其者の二反對に非ずして、眞理の由て現るゝ三大道其ものゝ二反對あり。これは眞理の不完全なるより出るに非ずして、人智の不完全より出る虚偽ありとす。虚偽の實有のものに非ず、眞理は實有のものあり、この實有に反對するものは即虚偽あり。故に虚偽は眞理より生ずるものに非ずして、眞理を思想する吾人の智力より生ずるものあり。夫れ哲學に因て現るゝ眞理は哲學上の眞理にして、吾人の智識を満足せしむるに足るべし。然れども哲學も吾人の思想を以て眞理を發見するの道なれば哲

第 二 節

第 三 章

(三八)

學にも眞實、虚偽の兩道を生ずるなり。學術、宗教の二者に於けるも亦然り。眞誠の宗教乃ち基督教よは完全無欠の眞理が天啓として現れたり。と雖も、一旦吾人の心意を以て思想する所となり、人間の智力を以て理解する所となりてより、人間の罪惡と無智に依て偽虚誤謬の宗教を生じ。竟に新舊兩派の岐教を生ずるに至りたる以所なり。然るに人は宗教を信ぜずんば學術に依り、學術に依らざんば哲學を頼み、三者の中の何れかに依頼するものある故、三大道の何れかを信據せずんば有可らず、必ず正邪の兩道を有する學術或は哲學或は宗教の其一を振るものなり。故に吾人は正道を歩まずんば必ず邪道を歩むあり、正邪兩道の中間位は斷然存せざるなり。吾人古今の哲學史を閲するに、何人の哲學も、何派の哲學も、皆な誤謬の空論にして、一の信すべき道理のなきが如し。と雖ども、決して然るに非ず、必ず眞理の一斑を含有するものなり。實に如何なる論説と雖ども必ず多少の眞理を有するものあり。宗教も亦それ







第 二 節

斑を含有すべしと信ずるなり。學術に至りても亦然り、學術の名を以て呼ばるゝもの世に多しと雖ども、學術皆な眞理なるに非ず、又た皆な偽りなるに非ず、諸般の學術中に眞偽の二者あるべき道理なり。近代學術を重するの餘り、學術と云へば皆な眞確實益なるものゝみなりと思ひ、一切學術を稱して實確學と稱するに至れりと雖ども、余を以て見れば一切學術は皆な實確學と稱すべからず、學術中の或部分を以て實確學と稱すべきなり。學術中實確學と稱すべきものは唯だ獨り眞誠の哲學、眞誠の宗教に符合すべき眞理に基立せるものゝみに限るべきなり。一切學術を實確學あり眞理なりと稱するが如きは、世界の人間は皆か智者なりと妄言するに何ぞ異ならんや。而して宗教、學術、哲學の三大道を一々考究するに、宗教、哲學の二者は重に形而上の道理にして、經驗上の智識に由らざる所多きなれど、學術は重に感覺上の智識に由て基立するものなり。故に學術は實驗觀察の法及び分解彙類の法を以て歸納的

第 三 章

に森羅万象の變化を討究し、參差極りあき万般の現象中より一定不變の形而下眞理を發見するにあり。既に論述せる如く宗教、學術、哲學の三者には共に眞偽ありて決して一々皆な眞なるに非ず、皆な偽りなるに非ず。必ず其一半は虚偽にして其一半は眞理なるべし。而してこの三大道の中に存する各眞理の相互關係は決して反對するものに非らず、又た類似せるにも非ず、必ず全く同一あるべきなり。例へば宗教に存する眞理と學術に存する眞理は必ず同一の眞理なるべしと信ずるあり、勿論徳義上の無形なる事實に關する理法と物理學上の有形事物に關する理法と同一なりと云ふの意味に非ず、唯だ眞理の性質に付て云ふのみ、然れども人智の不完全あるより、これらの同一眞理を和合する不能る事もあるべし。その故は乃ち此三大道中に存する各眞理の性質は疑もなく、同一なりと雖ども其表顯する所の異なるより自然不同の思ひあらしむるに由る。去れど決して



第 二 節

真理に三種の種類あるに非ず、只だ其表顯して人間の心意に達する所に三様の別あるのみ、真理は何時も同一なりと雖ども其觀る所に由て異なるのみ。山家集に

天の原同じ岩戸を出れども

光りことなる秋の夜の月

無二同一真理の宗教、學術、哲學の三大道に由て現るゝは是れ實に真理の三位一體あり、實に真理の機密あり。故に眞正の宗教あらんか、必ず學術と符合すべし、眞誠の哲學あらんか、必ず宗教と符合すべし、故に學術と哲學は決して反對せるものに非ず、必ず符合すべきあり。吾人真理の何たるを斷言するを得ず、去れど真理は只だ唯一無二なるを知る然れども既に論述せる如く真理の表顯する所は種々様々なり。宗教、學術、哲學の三大道中にも各小區分あれば、この小區分中にも真理の存するや疑なし。而してこの小區分中の真理も互に和合すべきなり。

第 三 章

此に學術中の物理學より一例を出して其理を解かんに、物理學の真理は理法是なり、物理學に於て確定せる理法に光線反射の理法あり。而して此理法は幾何學の理法と正然合同するあり。光線反射の理法は熱線反射の理法と合同するを見る熱と光とは(モト同一ナルモ)別現象あり、然れども熱線及び光線の平面鏡より反射するや、熱線の反射は直線を守りて、光線の反射は曲線を守るが如き事あらざるあり。凡そ一切萬法、一切理法は皆な同一に合し一に歸すべきなり。故に理學上の攻究益進むに從て益々真理を知るに至るは切々斷々の真理を發見して之を實用に供するが爲めのみならず切々接續なき真理を合一して一大圓絡となし、益進て真理の堂奥に進向するにあり。是實に理學、學術の目的なり。

○ 第 二 節

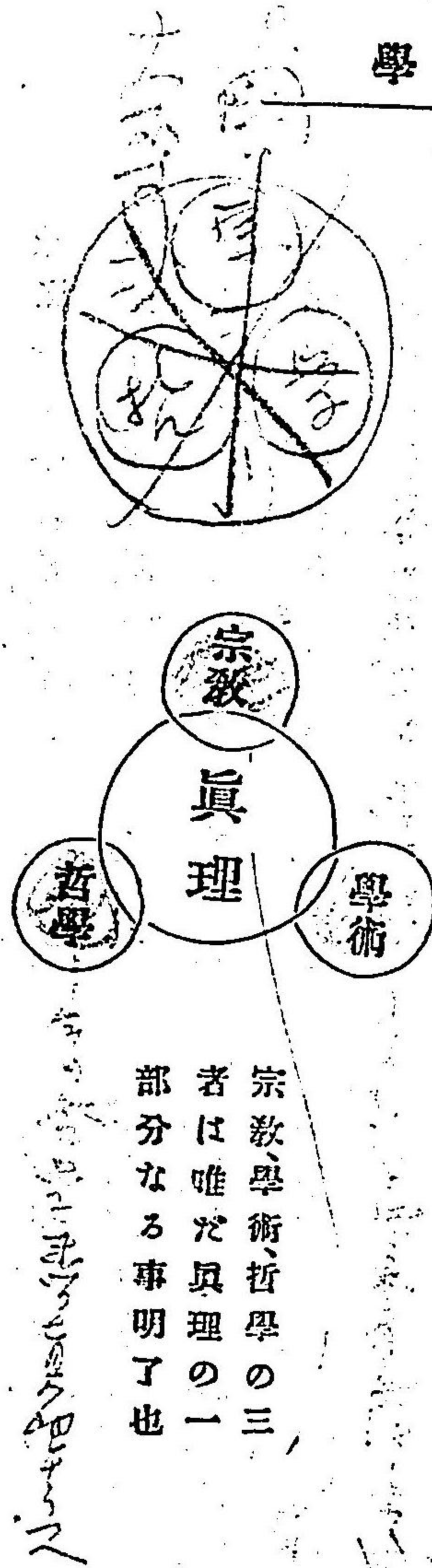
宗教、哲學、學術の三者は共に真理に達するの道なるを論ず

緒て前節に於ては獨一真理の三位表顯を論述して其各一は決して撞



第 三 節

着するものに非ずして必然合同歸一して真理の一大圓絡を成立すべきものある事を述べたり。由是觀之ば宗教にも哲學にも學術にも各真理の一部分を存するものある事を知るべし。然れども如此く三大道に現るゝ真理は完全真理の一部分に止て全體に非ざるなり。故に若し真理其者自ら人界に現れ真理の自體を人心に啓示する事あらば或は真理の全光を見るを得べきも唯だ有限有量有量礙の人心を以て達し得たる真理は決して完全圓滿の真理ある事を得ざるや必然たり。此の理を尙ほ充分に解せんが爲めに圖解する事左の如し。



宗教、學術、哲學の三者は唯だ真理の一部分なる事明了也

第 三 章

斯の如く真理は一なり、一なるが故に無限あり、無限あるが故に完全なり。故に真理の實躰は唯一、無限、完全、實に圓滿無缺の實躰あり。豈に有限有量の人智の包羅し得る所ならんや、人間は唯だ真理の一部を得て満足すべきのみ、而して人間の真理に達する道は實に宗教、學術、哲學の三大道あるのみ。この三大道の外に人間の真理に達するの道は一も非ざるなり。人苟も真理を知らんと欲せばこの三大道に由らざるべからず。吾人は眞誠宗教の一道を以て真理に達するを得べしと雖も、これを以て吾人の知り得べき丈の真理を知得せる者と云ふべらず、これ唯だ宗教的の真理を知り得たるのみにして、未だ學術、哲學二者の中に存するの真理を知らざるものなり。學術、哲學には宗教に於て得べからざる真理を得るの道あり。或は哲學や學術のみを以て充分真理に達し、天道を知り、人倫を明め、人界百般の秩序を經營し、國家の安寧を無久に保持するを得べしと信する者ありと雖も、これ宗教に、哲學、學術の二道に



第 三 節

於て決して達し得べからざるの真理あるを知ざる者の論のみ。故に宗教の一を取て他を顧みざる者は哲學、學術の二者の上に存する真理を見ざる者にして、從て智識に欠る所あり智識に欠る所あるが故に自己の信する宗教に對しても、未だ充分なる理解を得たる者に非ざるあり。頑固ある僧侶、修士の信仰や、無教育者の信仰の不完全ある所以也。學術或は哲學の一を取て宗教を顧みざる者は學術或は哲學の上に存する真理の幾分を得たりと雖ども、未だ宗教上に存する真理の何ものなるを知らざる者なり。宗教上に存する真理を知らざれば、既に智識の上にも真心、道義心の上にも多くの缺點あるが故、從て學術及び哲學の智識に於ても多く達せざる道理あるべし。是れ無宗教の學術家や、哲學者の理論、事業の淺薄輕忽にして社會に實益をなさざる所以あり。故に宗教、學術、哲學の三大道を合せ進むに非ざれば、智識の偏見を生ずるが故に、真理の(不完全ながらも)全面を觀視して眞智を得たる者と云ふべから

ず。

第 三 章

由是觀之ば吾人、真理を得て智識を完成するの道は三道なるが故に、吾人は真理を觀視する三眼を有するものあり。吾人は直接不間に真理を觀視せんと欲するも得べからず。故に或は宗教の眼鏡や、或は學術哲學の眼鏡を以て真理を觀視するの外なし。而してこの三眼鏡は各其性質を異にし其方向を異にするが故に恰も眼鏡の性質と向ふ所の方向の異なるに由て、吾人の眼に入る光線にも變化あるが如く、既に數々論ぜるが如く、真理にも亦多少變化を來さざるを得ざる次第あり。吾人はこの三大道に由て表現する真理を視るに止まるのみあり。然れどもこの此三道に由て表現せる真理は、吾人の思想に由て既に變化せるの真理なれば決して真理の本體に非ざる也。又た三大道の各真理は吾人の思想を以て得たるものなれば三真理は唯だ智識の範圍、制限を守るに現存じて、之を守らざるに消失し、真理轉じて非真理とあるなり。宗教には



(四九)

宗教に於て守るべき智識の範圍、制限あり、學術、哲學の二者に於けるも亦然り。

○第四節

宗教、學術、哲學の三者は互に反對せず

歴史に由て宗教、學術、哲學の古今の沿革を見るに、三者の間には今日より吾人の想像だも爲す能ざる程の甚はたしき爭論ありしなり。宗教家は曰く唯り宗教のみ眞理なり、他に眞理あるべからず。と哲學者曰く宗教は妄惑迷信あり、學術は枝葉なり、眞理は唯り哲學にあるのみ。と藝術家曰く宗教は妄信なり、哲學は迷惑あり、眞理は實驗觀察等の學にあるのみ。とソクラトはクレイキ宗教の反對者なり、宗教あり、死刑に所すべしとの宣告を受け實に眞理の爲めに致命せり。ガリ、ヲの學理は聖教に違反するものと認められ、哲學者キヨルダノブルノは「パバ」の審逐を被り羅馬府に於て火刑に所せられたり。智德兼備の聖徒ペートル、パウエルは

第 三 節

(五九)

第 三 章

クレイキの理學者に妄信者なりと稱せられ、ユウヂヤの法教師に異端者と稱せられ、至る所審逐を被り遂に基督の爲め、眞理の爲めに致命の死を甘せり。宗教家は理學者を烈火に投じ、理學者は宗教家を斷頭機の上に殺したりき、嗟何らの慘狀ぞ學術、宗教、哲學の三者は氷炭容れざるの仇敵なる乎、豈に三大道斯の如き性質のものあらんや。然れども下て第十七八の兩世期に至り既に流血の慘狀を見ずと雖も三者の爭論益々猖獗を極め、かの兩世期間の哲學は公然背神説を主張し、宗教を以て自由を害する魔鬼とみし、經驗學の起るや宗教に抗し、哲學を排し、宗教哲學を以て理學の進歩を妨ぐる邪魔者とみし、聖經を焼き僧侶を放逐せり。之に反して唯物論や經驗論は全勝を占め、自ら進み宗教に交代せんときてに放言せり。又た藝術家の哲學を忌み、哲學を無用視するは實に十九世期の今日に於て大に怪むべき者あり。何れの國何れの大學校に於ても、哲學を教授し之を專修する學者の輩出するにも不係、物理學、生



第 四 節

理學、醫學、其他實驗學を專攻する者は何の理由もなく未だ哲學の何たるをも知らざるに哲學を排撃し哲學を無用視するに非ずや、實よこの三大道は互に刃を磨き仇敵視し居るは覆ふべからざるの事實なり。三世期の神學者グリゴリイ及び亞歷山亞のクリメントは哲學を以て善良なる宗教の姉妹ありと云ひたるに、今や哲學を忌避する宗教家あり。宗教を妄信とする哲學者あり。ペーコンの語に曰く、學問を深く研究する者は宗教に達すべし。皮想淺慮ある研究は無宗教に陥るべし。とそれ今日の學者は之れに反せり。學問を深く研究せる者は必ず無宗教者にして皮相淺學ある者は宗教家なるを當然の事とせり。人は淺學にして道理に暗きが故に宗教を信するに至るか、將た或は宗教を信するが故に學淺くして道理に暗くなるか何れに原因するかを不知と雖共今日の輿論は宗教は學者の信すべきものに非ず、無學文盲者の信仰すべきものありと云ふ説なり。宗教豈に如此きものあらんや、宗教は人生の秘密

第 三 章

を解釋し宇宙の奧義を明説するものなり、其智識の深遠ある學術、哲學に超越するも決して下らざるなり。然るに中世期の學者が學術上心理學の立べからざるを主張して心理學者に反對せし如く、古來哲學の世に出で、より以來哲學の目的を達すべからざる事を説き、哲學の無用を論ずるの學者もなきに非ざるなり。近ハ英國にリユースありて哲學、理學の兩立すべからざるを論じ哲學の立可らざるを證する爲め數百頁の哲學史を著述せり、其緒言に於て云て曰く、凡そ哲學の無用立可らざるを論ぜんが爲めに哲學史を著述する者は余の外に決して非ざるべしと實に然り、哲學の立可らざるを哲學的に論述して哲學史を著述せる者は氏の外に非ざるべし、誰もかゝる愚ある勞を取らざるべし。然れども其前にコンデルウヤクあり同く哲學と理學の並立せざる所以を論述せり。又た哲學と學術の關係を全く別に解する者もあり、其の説に曰く、哲學は學術の幼稚なるものにして、哲學進歩し開發すれば自然學



第 四 節

術の域に達するなり、今日の學術は即ち哲學の進歩せるものなりと、然れども哲學者の諸論は是に反せり、乃ち學術は哲學に由て基立するものなり、哲學は根本にして理學は其枝葉なり、デカルトの如きは専らこの説を主張せり、今日我邦に於てすらも哲學を以て原理の原理を論ずるの學ありと云ふ説行はる、是れ皆な余が論ずる所の三大道の關係を知らざるものなり、余が説は全くこれらの説に反せるあり、原理の存する所は勿論三者共に存するなり、然れども學術の原理が哲學の原理となるに非らず、又た哲學の原理が學術の基本となるにも非らず、各別異なる原理あり、別異なる討究の方法に由て各真理を發見するにありと云ふ説なり、

(故に)如此く宗教家は哲學を無用とし、哲學家は宗教を無用とし、學術家も哲學、宗教に反對するは、是れ全く三大道の何者たるを知らざるに由るものあれば、敢て怪むも足らずと雖も、若し彼輩をして宗教、學術、哲學

第 三 章

は真理得達の三大道にして、何れも真理あり、何れの真理も同一真理の異面にして、反對するものに非らずと云ふことを知らしめば、互に和合して各其位置を守り、真理を討究し、以て社會を益する實に輕少ならざるべし、彼等にしてこの三大道を合せ進むに非ざれば、人間の本望、倫理の目的を達する能はずと云ふことを解得せしなば、互に寛容して、他説の是非を公平に判し、僧侶を刑し、哲學者を毒殺し、學理者に火するが如き殘酷を見ざりしならん。

○第五節

宗教、哲學、學術の三者は同一ならざるを論ず

前説に於ては、宗教、學術、哲學共に反對して互に駁撃し、同く真理に達するこの三者をして、敵對の位置に立たしめたるを見たり、次にこの節に於ては、宗教、學術、哲學の三者を合同混合せんとせる者の議論を考究せんとするなり、或る宗教家の論に曰く、理學も哲學も是れ宗教と別物を



第 五 節

るに非ず嚴密に論究するときには三者の間に截然たる區別あるに非ず、たとへば佛教には宗教あり哲學あり、又た理學もありて佛教中に含有密合せり、歐米人が實驗、觀察、積年の効を以て、近年に至り始めて發見せる理學說も哲學說も皆な印度宗教中千古の昔時より含有せるなり、故に佛教は眞誠の宗教なるべし、又た眞誠の哲學あるべし、と彼輩は哲學、理學を混合含有する宗教を以て宗教の眞誠なるものとせり、故に佛教は哲學及び學術上の理學說を合同含有するを以て眞誠なる宗教あり、萬宗教の王たる所以なりと斷言せり、是れ宗教に哲學、理學を合同併混せんとする論なるのみ、如此き議論は歐洲の宗教家中にも一時輿論となりたる事あり、即彼輩は基督教中、理學もあり、又哲學も存して學術と哲學は宗教の原理に因て立つものあり、故に基督教唯り眞理の大源にして萬有の學術も基督教に存するものなりと論せり、これ又た學術、哲學を宗教即基督教に沈設せしめ混合せしめんとするの論なり。

第 三 章

吾人は第一世期及び第二世期頃の宗教史及び哲學史を閱するに矢張り宗教を以て哲學の一部となし、宗教と哲學を混合々併せんと試たる奇事を視るなり、彼輩の意見に由れば哲學は即ち智識の學問なり、而して眞誠の宗教は必ず智識に由て立たざるべからず、故に宗教を智識の基石に堅立せしめんとするには宗教を以て哲學の一部となさざるべからず、宗教の道理を哲學上敏辨的に解釋せざるべからず、と是れ宗教、哲學を混合せんとするものなり、而して當時代の學者は學術も哲學の一部なりと思想せる者なるが故、是亦た宗教、哲學、理學を混合せんとする者なり、この説を主張せるは、グノステイズム派の學者及び新プラトウ派の徒其他凡てアレキサンドリヤ學派と稱する學派に屬する學者を以て嚆矢なりとす、既に前章第二第三の兩節に論ぜし如く、彼輩は宗教に對して智識の關係を重じ智識の價額を非常に高くし、宗教の奧義と雖ども智識を以て解釋するを得べしと論ぜる者なり、故に彼輩の意



第 五 節

見を以てすれば、宗教の原理は皆な智識の達する所なれば、この智識は昔時ユツレイ民の大祖雅各が夢見たる天に達する梯の如く、これを以て神の寶座までも達するを得べく、人間萬事唯だ智識の一道を以て經營するを得べしと想像せり、中古に至りデカルト以前の「スホラステカ」の徒も同様なる見解を以て宗教と哲學を混合せんと試たり、彼徒は哲學、宗教の合一を謀り哲學を基礎として宗教の大厦を建設せんとせり、なり、宗教を哲學的に解釋して一點の疑惑もかからしめんと企だてたるなり、デカルト、マルブランヌ等の諸氏も同主義を懷きて自己の哲學は宗教の原理なりと信ぜり、實に彼輩は宗教と哲學を混合せり、哲學を以て宗教の奴隸となしたり、是れ實に十六世期前後の哲學は全く宗教神學の裡に埋没せられ、哲學を講ずるの場所は只だ教法學校の一あるのみにして、哲學は言論の自由も、思想の自由も全く宗教の剝奪する所とあり、只だ教會の教權のみを尊奉するに至りたる原因なり、是れ宗教

第 三 章

家も哲學者も二者の正當なる關係を誤解せるより起りたるなり、若し余が論述せる所の三大道の關係を確認せば決して宗教と哲學を混合せんとするが如き事を爲さざるべし。

○ 第六節

宗教、哲學、學術の三大道を合せ進むに非ざれば人間の目的を達するを得ざるを論ず

嗚呼是れ人間は果して如何ある者ぞ、彼は天地に俯仰して萬有の現像を觀察し、理法を發見し、星辰の大分子の微に及ぶまで智力を以て之を網羅し漏すなからんとする怪物あり、彼は自己のこの世界に生存する理由、我の由て來る本源、我の去て行く歸結、惡の何たる、善の何たる、來世の有無、靈魂自我の不死、神、實在者の何たるを解釋せんとする一奇物あり、人間は自ら其の智識に向ふて、眞理とは何ぞや、神とは何ぞや、世界とい何ぞや、無限、心、物、とい何ぞやと常に奧妙なる道理を冥想する異物なり、又人間の之を探り之を知らんと欲する者なり、之を探究し、之を思想



するが故に人間の人間たる價直を有するものありこの目的を達し結極の眞理を得るの吾人々類の終結の願望なり實に倫理の大本なり然らこの目的を達しこの願望を成就せん如何ある事をなすべきや或は宗教を信すべき乎或は哲學、理學を考究すべき乎然り宗教を信すべし哲學の奧妙を究むべし學術の深玄を得べし然ら則吾人倫理の大本を全ふするを得べし。

余既に前の數節に於てこの三大道の何たる事を論述しこの三大道の何れも眞理を得るの必順要訣にして三大道共に特異の眞理を含有するものあるを示せり又三大道の各眞理の別眞理あるに非ず同一眞理の異面あり各眞理の相對するものに非ず又互に混合すべき眞理にも非ずと云ふとを論ぜり宗教、哲學、學術の三大道の實に唯一眞理の三位にして其表現効要をこそ異にすれ決して別眞理に非ず同一眞理を異面より見るものあり故に宗教にの哲學、學術二者の中に存せざ

る眞理を含有せり哲學にの宗教、學術の共に有せざる眞理存するなり實にこの三大道をして調和圓合せしめ以て眞理を得るに非ざれば完全なる眞理の三面を見るを得ざるなり。

◎第四章 宗教發生の基源を論ず

この章に於て人間の心意に神の觀念存して宗教發生の基源とある次第を論究するものあり。

○第一節

人間は天賦神の觀念を有するを論ず

第一章より第三章に至るまでの宗教の本性の何たるを論述したるを以て今哉宗教の基源及び發生の事を論述する場合となれり然るに宗教の基源發生の事を述ぶるに當りて豫め考究すべき道理あり即ち神之觀念は天賦に有する處の觀念にして之を廣く云ふときは宗教の觀念或は宗教心を云ふものある事これなり



第 一 節

宗教の基源發生を論ずるには右の議論の外に少しく述べ置くべき事  
 今一あり他なし宗教の基源發生を論ずるには如何なる點より論を起  
 すべきかと云ふ事なり今宗教發生論の種類を見るに主觀的發生論と  
 客觀的發生論の二大別を見る、主觀的發生論とは即宗教の發生を心理  
 學上の心性に歸して宗教の基源を論ずるなり、客觀的發生論とい即宗  
 教の依て起る所を歴史上或は古物學或は社會學、言語學等の點より論  
 ずる事なり、然れども其一のみを撮りて宗教の發生を論述解釋する時  
 は不完全なるか若しくは無實の誤謬論か、何れよしても其一を免れざ  
 る也、世の哲學者及び神學者中には主觀的發生論を撮り其中より人心  
 の感情或は智識を撰みて宗教の發生を論ずるが如きことなきにしも  
 わらず、或は社會學及び進化論を以て宗教の發生を解釋せんとする者  
 なきに非ずと雖ども未だ以て確論とするに足らざるあり、然れども客  
 觀的發生論も主觀的發生論も共に誤謬なるに非ず二者中には各他の

第 四 章

者にあき性質の理論を含むを以て余は二者の中より最も確實なる論  
 を撮り主觀的發生論と客觀的發生論との調和を謀り宗教發生論の眞  
 理を論ぜんとするなり。  
 借て目下考究せんとする問題は人心に天賦神の觀念存すると云ふ事  
 なり、然るに天性と云ふものも哲學上の問題にして現に今世期に於て  
 も日耳曼の哲學者、英國の哲學者中實驗學派と觀念學派、名稱論者と實  
 験論者との間に盛に討究する處の問題なれば我國に於ても種々論者  
 ありて各異説を懷き居るとなるへし、近頃我國に於て外國より譯出し  
 又新機抽らしき著述の心理學などを讀むに全く唯物經驗論に流れて  
 本性或は先天性と云ふことを排斥する論者の間々あるを目撃するな  
 り、然れども余は人心に先天性及び本然觀念の存すると云ふ説に左袒  
 するものなり、故にまた神の觀念も必然人心に存在すると云ふ説を主  
 張する者なり、先天的の本然觀念の存在せざるを得ざる理論は別に著



第 一 節

述する所の神の存在の證據論に於て細論すべければ此には只だ神の本然觀念は必然人心に陰伏して存すると云ふ論の一斑を考究せんとするなり、既に前論にも畧述せる如く如何ある哲學者と雖皆な神の觀念なる者を其教理の全躰に通して正定せざるあきあり、唯だ神と云ふ名目を忌避して種々の異名を設るのみ、然れども其實は到底異名同物たるを免れざるなり、無限絶對者と云ふも不可知的存在と云ふも無限在の物質と云ふも實躰或ハ實在と云ふも同じく神の異名たるに過ぎざるなり、神の觀念の外には無限と云ふ事も絶對と云ふ事も其他の名目も共に相當すべき者あらざるなり、神は實に絶對あり不可知的なり又無限的なり、萬人の心意に其影を留め天地宇宙を包羅するものなり、哲學思想の、人類の歴史上に現れざる以前より神の聲ハ人心に響き人心の最蘊底に潜在せるなり、神の觀念は先天的にして其確實なる事數學律の二に三を加ふれば五なりと云ふ猶ほ先天的觀念の確實なるが

第 四 章

○ 第二節

根原の神の觀念を論ず

如し是の觀念の經驗的にあらざる事は猶ほ幾何學原理の經驗的にあらざるが如し、而して今神の觀念を細別するときは下論に述るが如く、根原の神の觀念、哲學的の神の觀念及び德義性の神の觀念の三種ありとす、ぼふいん氏も云ひたる如く是の觀念を別々に見るときは實に不完全なる觀念なれど其全躰より之を見るときは、最も完全あるものにして、決して排斥すべからざるものなり、以下將に節を逐てこの觀念の三様を略述せんとす。

既に前説にも論ぜし如く、吾人は先天的の觀念として神の觀念を有するものなり、而してこの吾人の心意に存する神の觀念は、唯一不可分割の一觀念ありと雖ども、之を其表面より見るときは、三種の別様あるを見る、其一是原本の神の觀念是れなり、この觀念は、此の世に生れ出る人



第 二 節

の心意の蘊底に存する本然にして、時間空間の先天的觀念の如く、必然  
 抜き難き性質を有するものなり、(其の二、三は第三節以下に於て詳論す  
 べし)事物を研究して道理を知り、眞理を發見すると云ふことも、人は本  
 然觀念なる神の觀念を有すればこそ、是れは道理なり、眞理なりと斷定  
 するを得るなれ。此にこの觀念を稱して神の觀念と云ふと雖ども、他の  
 場合に於ては、宗教の觀念、或は眞理の觀念とも稱するなり。完全の道理  
 と云ふものも、絶對の眞理と云ふものも、吾人の未だ嘗て目を以て視、耳  
 を以て聽き得たる事なく、又た如何なる大聖大賢と雖どもこれを明得  
 せる者は非ざるべし、然どもかゝる道理、かゝる眞理の實に存在するを  
 信じて、疑議せざる所以は人心にこの本然觀念ありて、暗に其の存在す  
 ると云ふ念慮を指示するに由る。吾人教育の効に由て心意を開發し得  
 ると云ふ事も、深く考究するときには唯だ外物を指教するに由て、心意の  
 開發を全ふすべきに非ざるを知る。教育の効能は吾人の心意に本然觀

第 四 章

念存在して既に開發すべき原子を有すればこそ、灌養の助を持のみに  
 て、教育も充分の効を奏すべきなれ。現今の教育法は、即實物教育を重じ  
 て外物を其まゝ教授して、次第に道理を知らしむるものなれば、之に由  
 て心意を發育開展するを得るや疑ひなし。然れども高尚なる道理、或は  
 深玄なる眞理の如きは外物の觀察、實驗にのみ依頼して得らるべきに  
 非ず。多くは吾人の心意に潜伏して存する觀念を開發せしむるに由て  
 得るものなり。教育は唯だ既に存するものに心を向はせ、教へ、育だて導  
 くに過ぎず。反省天啓の効に至りても亦然り。若し吾人々類は先天的に  
 神之觀念を有せずんば眞理を發見せんとて禪觀反省するも、無一物の  
 空心に由て何の得る所あるべきや、天啓を受るも吾人にこの觀念なく  
 んば何の得る所かある。佛教には禪觀と稱する所の眞理研究法ありて  
 禪僧の如きはこの法に由て思想を練り以て眞理を得べしと信ずる者  
 あり。これ西洋哲學者の用ある冥想、或は觀想と稱する反省法にして、眞理



第 二 節

は外物に由て得らるべきに非ず、唯り沈思冥想するに依て得らるべしと云ふ道理に基ひするものなり。然れども佛教の禪僧にして若し我心意に眞理の觀念存すると云ふとを知らずんば、かゝる反省研究をなすも何の効も非ざるべし。然れども吾人々類の一切心意に本然的に存在するこの根原觀念は必ず一様に開發すべきものに非ず。人に由て或は多く或は少く、或は早く或は遅く開發すべし、或は全く開發せざる事さへなきに非ざるべし。今若しこの觀念の存するのみに放棄して、天啓教の指道もなく、沈思冥想の反省もなく、この觀念をして自然に開發せしむるときは此より如何ある結果を生ずるかと云ふに、或は純全たる一神教の開發するあるやも知るべからずと雖も、多くは粗荒なる妄信とありて或は「拜物教」とあり、或は「動物教」となり、其他「鬼神教」の如き不全なる宗教を發生するの原因となるなり。第五章第一節妄信的宗教發生論を詳述するを俟て其理を論ずべし。

第 四 章

○ 第 三 節

哲學的の神の觀念を論ず

第一節に於ても略ぼ論述せし如く、哲學者の思想に存する神の觀念は一種特別の様子を見るあり。故に之を稱して哲學的の神の觀念と稱するなり。而してこの哲學的の神の觀念は、前節に述べたる根原觀念の種子、啓發開展して反省法、及び續釋推理との涵養に因て略ぼ完成し、哲學者の神の觀念となりたるものなり。この觀念の重に關する心意作用は、智力に厚くして感情意志に薄きなり。故に又たこの觀念を稱して智力上の觀念と稱するも可なり。今まこの智力上の觀念のみを採りて少しも他を顧るなく、天啓の指導も、良心及び情感の勸告も容るゝなく、嚴重ある續釋法を以て推理するときには淡泊無味ある有神論若しくは、萬有神教の如き哲學を生ずるに至るなり。故にヤコビは「吾人の思想に於て推理演繹の法を以て得達する哲學は皆無神教なり」と斷定せり。クノ







一時東洋及び西洋に行れたる事あるを以て、余はこの觀念を以て同く宗教觀念の變態として論するなり。第五章第二節哲學的宗教發生論に於て、この觀念より發生せる宗教心を證明するを俟て、如何なる理論の結果を生ずるやを明むべし。

○第四節

感情及び徳義性の神の觀念を論ず

以上三節に於て論したる神の觀念は、人間の心意の根原、及び智力の上  
に存する觀念なるが、この二觀念と並立すべき重要なる性質を有する  
一觀念あり。これ即感情及び道義性の神の觀念と稱するもの是れあり。  
この觀念は、人類生活の狀情、其他吾人の生存物に對する關係より凡百  
の人情及び情操に、充分適當して反戻する事なきは實に驚くに絶えな  
る者なり。交際の願望、親屬兄弟の情愛、智識の渴望、驕誇、爭先、驚駭、交感憐  
憫、嫉妬等の赴所は悉く皆一々是に對する目的を有する願望、及び要

第 四 章

狀にして、此等の目的に達し此等人性の要求を満足せしめん爲め、絶え  
ず吾人を促して慣勵せしむるものたり。さて爰に斯る原本情操の一に  
して第一段に置くべきものあり。即敬神の情操是れなり。之を形容する  
ときは、敬畏と尊敬と、信任と、禮拜の念との相混交したる者あり。一切有  
限物はみな以て此の情を満足せしむるに足らず。是れ素より人力を以  
て故さら發育せしめたる情には非ざるあり。其人力を俟て發育せし者  
に非ざるを知る所以の者は、他無し、一切宗教、一切神學、一切教育は是に  
懇へて其眞を證し、之を以て基本とせし、是を以て立能はざる者  
なる事是也。但し獨り此情あるのみにして、之を潤脩する所以の智識な  
きときは、只た盲突の變動たり、欲望たるに過ぎず、且つ誠に到亂し易く  
して現に、世上無數の妄信の母たり。之を督制せず、之を補綴するに天啓  
或は教法の命、或は道德の教義を以てせざれば、實に其結果は強孟粗荒、  
怖るべきものなり。然るに又た是に加ふるに、義務の心情、職分の意志な



第 四 節

どを以てする故、其督制を失するときには惑溺妄信あるのみ。この一段は  
 ボウイン氏の理論なり。吾人は第五章第三節に於てこの道義性の上に  
 存する、神の觀念の開發して、宗教とある次第を論述すべし。  
 以上三節に於て述べたる、神の本然觀念論は、唯だ其一斑を述べたるの  
 みなれば、詳細に極論して之を證據せるものに非ず。名目論、概念論、實跡  
 論の間に討究せる如き、本然觀念、或は普關觀念の理論を述べたる者と  
 爲すべからず。余は之を證據せるに非ず、今は實だ其存在すると云ふと  
 を指定せるに過ぎず。神の觀念の人心に存するを證據せんには、別に一  
 書を要する程あるべし。吾人も亦たプラトノ以後の哲學或は哲學史を  
 精細に講究せる後に非ざれば、充分ある思想を吐露する能はざるなり。  
 今は唯だ神の本然觀念の吾人の心意に存在すると云ふ事を、略述する  
 のみて充分なるべしと信するなり。

第 五 章

◎ 第五章 宗教の發生を論ず

此章に於ては、前章に於て論述せる人類固有の神の本然觀  
 念開發して宗教の原素となる事、及びこの觀念より開發せ  
 る宗教の不完全ある次第を論述するもの也。

◎ 第一節

根本の神の觀念開發  
して妄信となる事

前章第二節に於て論述せる根本の神の觀念は之を開發せしむる所以  
 の事情の異なるに従て種々様々に開發するものなり。或は又た之を開  
 發せしむる所以の事情なくんば、或は全く開發せずして果る事さへあ  
 るべし。然れども多くは種々の事情に遭遇して様々の状態に開發する  
 を常とす。吾人々類の最も多く遭遇する事情、最も多く受る所の事情は  
 人類の居住生活する境遇に存する自然の事情なり。偕て其境遇及び自  
 然の事情とは如何ある者ぞと問ふに、吾人の生活する世界、吾人の身邊  
 に羅列して、目に視、耳に聴くべきもの、凡そ五官の觸るゝ所とあるもの、



第 一 節

及ひ寒暑冷暖四期の状態、天地風雷、一切萬有の諸現象は人間の心意開發の狀態に影響を及ぼす所の境遇事情也。特に未だ人々相集合して、社會を結ぶに至らざる、未開の時代にありては、人類の心意に影響を及ぼすもの唯り自然の境遇事物あるのみ。吾人には言語を發するの天性ありと雖ども、若し教育、遺傳、風習、其他外物の影響なくんば、吾人天性の言語も、遂に言語とならずして止まんのみ。人間固有の宗教心も、諸他の才能、心意作用の如く、外界境遇の事情に影響せられて、始て開發するものなり。然るに今日の如く開化に達せる社會に於ては、社會の風俗と云ふもの、習慣と云ふ者、人民の教育と云ふ者既に一定して、其趣を作りたる故、特別ある社會の境遇となりたれど、前にも論ぜる如く、野蠻未開の時代には、其境遇は社會境遇と非ずして、自然的境遇あり。人々の直接間接に被る影響は、土地山河の狀態、食物、氣候、外敵の有無、あとのみなれば、宗教心開發の機會媒介となるものは、唯り自然的境遇の影響あるのみ。故

第 五 章

に神の觀念を養生し、變化して宗教心とせし、宗教心を開發して、自然宗教とならしむる原因媒介は、自然の境遇あるのみ。然らば天啓、神示の補助もなく、史傳の脩成、教育の指導もなく、宗教の觀念を自然に開發せしめたる宗教は、如何なる宗教あるかと云ふに、粗荒の妄信あるのみ。是れ今日世上に無數の妄信を見る所以あり。佛教にまれ、神道にまれ、苟も自然に開發せる宗教の範圍に入るからは、皆妄信偽教たるを免かれざるあり。基督教は自然發生の宗教に非ず。基督教は宗教心の原因教なり。宗教心を吾人に賦與せる萬有の原因者が、吾人に啓示せるものは、即基督教なり。其詳論は宗教哲學全部の出るを俟て知るべし。 借て人間固有の宗教心より自然に發生せる宗教の性質如何を考究せん爲め、此に二三の實例を示さんに、未開野蠻人の間に存する祖先教の如きは、妄信の尤も幼稚なるものなり。唯だ自然境遇の感化影響に因て開發せる妄信、即ち動物教、拜物教の少しく進歩せるものに過ぎず。亞米



第 一 節

利加北氷洋洲及び南ベタゴニヤの蠻民は悉く祖先を禮拜せり。支那朝鮮及び我邦民中にも、今尙ほ祖先を禮拜する者多し。朝鮮に於ては今も祭時よは、僧侶もなく、神官もなく、一家の長者祭司となりて、祖先を祭ると云ふ。又たペロン人中の婦人は、死人の代りに石を祭り、是に飲食物を供へ、平伏して禮拜すると云ふ。又た同人種は如何あるものよても、奇異又は異常ある物を見れば、靈のあるもの、如く尊ひ畏ると云ふ。是れ皆亦自然に發生せる妄信教なり。埃及のバホチスと云ふ女神は新月を形どり、アルテミスと云ふ神の紋章、及びスリコと云ふ神の紋章にも一々形を異にする月の像を用ゐ、仙臺地方の愚民は、廿三夜と稱する夜に月の上る時、月影變化して三神像とらいごう現るゝを拜するを得ると信する者あり。近年信州越後地方に週遊せしとき、かゝる信仰を多く認めたり。アリアン人種の鬼神話中のアイヨと云ふ神は同く新月を祭るものなり。これらの信仰も皆亦宗教心の自然に開發して宗教とありた

第 五 章

るものに相異なし。又たソウエロン人は巨大ある銅像を鑄て神となし、この神像は掌を開きて供物を受る様に作られ、祭時には銅像の中に炭火を熾にして之を熱烙し、信者中熱心なる者は自分の嬰兒を其掌に供物として献じ、其焼るを見て大いに喜びたりと云ふ事、古代史に見へたり。ホッテントの蕃民、其他の亞弗利加の野蠻人は酋長を以て神の子孫とする故、其酋長死去するときは數百の土人を斬殺して、其地下に伴侶せしむると云事、輿地誌畧に見へたり。北海道のアイノ人種はヤケイ公(義經ならん)を以て神とあし、食時毎に先づ之に食時の祈禱して而して後に食すると云事、余が祖父の北海道旅行記に見へたり。如此き妄信の種類を我邦一國に求むるも、其數實に枚擧に勝へざるべし。特に我邦に多きは、動物教及植物教なり。彼の狐狸を稻荷の神として禮拜する如きは、日本全國の下等民の妄信あり。又た古木、大樹を神木と信する者多し。落雷せる木を神木とする愚民もあり。彼的那須野が原の殺生石に狐靈あ



第 一 節

りとの妄信、及次佐夜の中山の夜鳴石の妄信の如きは拜物教の一種なり。是れ皆な人間の心意に本然存在する神の觀念即宗教心の自然物の影響を以て感化せられ、遂に妄信となりて現れ出でたるものなり。然るにこの妄信は直に進化一變して高尚ある一神教や、教典儀式を完備せる宗教とあるべしと信ずる學者あれど、是れ大なる誤謬なり。下等妄信は悉く進化して高等宗教となるものに非ず。以上枚擧せる日本民の妄信は今日尙ほ存するものなれど、かゝる妄信は決して進化するものに非ず。凡ての妄信教を感化して之を進化せしむるものは、吾人の稱して哲學的の信仰と名する所のものあり。この信仰發生すれば其影響を下等妄信に及ぼして之を變化せしむるや疑ひなし。然れども高尚ある哲學的の宗教信仰は妄信の進化せる者に非ず。この信仰を發生せしむるの原素は即ち第二節に於て論述せんとする所の、哲學的の神の觀念あり。

第 五 章

○ 第 二 節

哲學的の神の觀念開發して哲學的の宗教となるを論ず

緒て次に、哲學的の神の觀念と稱する本然觀念の開發する次第及び其性質を論述せん。時の古今を問はず、地の東西を論せず、人類生存の以來、一度智識思想の完成するや必ず哲學的思想の開發せざるはなきなり。今この哲學思想と稱する者を分解する時は、人間の運命を知らんとする思念、人間の住居するこの世界の原因を知らんとする思念、神の存在を確知せんとする思想、善惡の何ものたるを知らんとする思想等の高尚ある智識の渴望あり。社會の開化が一程の度に達するや、其の開化の程度に相應せる理學、及び哲學的思想を發生するものなり。之を發生發達せしむる事情、原因を悉く搜索するが如きは、淺學の能くする所に非ざれば、唯だ此には其發生せしむる一原因、一事情を論述せんとするあり。古代未開の人民や、今日現存の野蠻民の間には、事物の原因を考究するものなく、萬物の原因を探り、人間の運命を知らんと欲する



第 二 節

者もなき故、哲學的思想の如きは其元種だも見へざるなり。從て宗教心を開發せしむるは唯だ自然界の一あるのみよして、外に其天賦性を淘汰するものなければ、哲學思想の發生すべき道なきなり。然れども人間の智識次第に開發して、些少ありとも天然を制し、自然の境遇を變じて人間の性質、傾向、好惡の如き性情に適合せしめんとする思想の發達するや、必ず哲學的思想を發生するなり。然るに一旦この思想の發生するや、必ず是に相繼續して發生せざるべからざる思想あり。即神の觀念及び宗教心の開發是れあり。既に前章にも論ぜし如く、神の觀念及び宗教心は元來人性に隱伏しありと雖ども、之を發生發達せしむる所以の機會、事情なくんば、決して發生すべき者に非ず。機會、事情を得て發生するや、其機會、事情の性質如何に因て其發生の様狀を異にするものあり。去れば哲學思想の養ふ所とあり、この思想の要求する所とありて發生する宗教心も其哲學思想と順合して、其性質を一樣に爲ざるべから

第 五 章

ず。哲學思想中には素より道德の思想を含有せざるに非ずと雖ども、其根本とするものは智識是れなり。故にこの智識は哲學的の發動を始ると同時に、この智識の天性に隱伏して存在せる神の觀念も哲學的の様子を以て發生すべきあり。是即全世界の哲學中一として神の觀念に關する理論を含有せざるなき所以あり。全世界の哲學は皆なこの觀念の發生を伴て、宗教的精神を受るに至りたりと雖ども、其哲學者の哲學を考究せし目的、當時の風俗、時代の要狀、學者の性質、學識の如何、教理の性質の如何に因て、觀念發生の有様、理論、名目の如きは實に千差萬別なりとす。理論を異にし、名目を別にするも雖ども、亦皆同一觀念の發生に非ざるも、恰も妄信の中に拜物教あり、動物教あり、偶像教ありて實に千差萬別なりと雖ども、同一宗教心、同一神の觀念の自然發生たるが如し。讀者適例の多きに倦まずんば、余は數十百の例證を擧て神の觀念の哲學思想中に發生する所以を示さん。



第 二 節

吾人クレイキ古代の哲學史を閱するに、其開卷第一に見る哲學者はテ  
 ールスなり。テールスは萬物の原因を水なりと論ぜり。然れどもモセロ  
 の説に由ればテールスは眞神は水より萬物を作りたりと論ぜし也と  
 されど今日の學者はこの説を採らざるあり。故に假りにテールスは眞  
 神を信ぜざりしとするも、彼に神の觀念の開發なかりしと云ふ説は立  
 たざるあり。如何となれば、レウエス氏(テールスを以て無神主義の哲學者  
 ありと斷ぜる人)も證明せし如く、テールスは萬物を以て渾て生活せる  
 者となし、天地を以て惡魔或は諸神の充塞する所なりと云ふ説を維持  
 したるは覆ふ可らざるの事實あり。故にテールスも諸他の哲學者と一  
 般神と云ふ觀念を其哲學中に發生せしめたるや明白なり。然るにダイ  
 オニスに至りて、宇宙は止た生命たるのみならず、又た睿智なり、而して  
 睿智は即萬有の元始なりと云ふ理論出てたり。數學哲學者アナキシマ  
 シターは萬有の元始は無極全數なり、而して無極の全數とは無極の餘

第 五 章

存在と云ふ義にして無極の心意ありと論ぜり。これ皆な基督教及び西  
 洋哲學に於て云ふ神の異名なり。ピサゴラスは唯一は萬有の原因なり  
 と論ぜり。エリヤチック學派のゼノファテスは天の極大に向ひ仰視して唯  
 一は即ち是れ神ありと大呼せり。且つゼノファテスは神は完全至聖ある  
 者なりと論ぜり。パルメデスは唯一は即ち萬有成立なりと論ぜり。エ  
 リアのゼノイは宇宙に唯一實在ありて、是より無限不可割的のもの生  
 ずるとせり。是れ皆な以上の哲學者が哲學思想を以て宇宙の原理を發  
 見せんとするとき、其思想中に潜伏せる神の觀念の發生せるものなり。  
 ヒラクリダスは此の世界を評して、シヨン即ち火神の遊戯なりと云へ  
 り。アナキサゴラスは道德の睿智と云ふ觀念を懷けり、而して之を解釋  
 して運動元なりと主稱せり。エンヒドクルスは其詩に於て、其の完全な  
 る狀を説言す可らざる所の眞聖なる聖神あり、即全世界に超絶せる最  
 も神妙なる思想を有する者也と云へり。プラトンは神を以て萬有の原



第 二 節

因とあして吾人の生來せる古郷あり善美の原因なりと論述せり。アリストテールも有名なる有神論者にして神を以て世界の原因ありと論ぜり。シセロは有名なる有神哲學者あり。デカルトは神は萬有の原因者にして絶對無限の實在者なりと論ぜり。アペリアールは哲學と宗教を混交して、哲學的の有神論を構成せり。中古時代の唯物論者は其哲學中に神の觀念を論ぜざるかと云ふに決して然らず。彼輩は神の代りに永遠實在の物質を立て、神と云ふ名目を排斥せり。然れども是れ又永遠實在と云ふ名目にも見へる如く、神の榮光を覆ふの異名たるのみ。マルブラノス及びバスケル共に近世哲學者中の錚々たる學者なり、而して其哲學の全脉の基本とすべき者は神の觀念なり。カントは神の存在を哲學的證明に證するを否定せりと雖も、神の存在を充分に信認せり。セルリソング、ヘーゲルは、斯絶對實在者と云ふ名目を以て哲學を立て、世界を以て神の變化開發なりと論ぜり。スピノーザはデカルト、ゲリソクス、マルブラ

第 五 章

ソメの哲學に由て起りたる哲學者にして、神を以て世界となし、世界を轉して實在者となし、有名なる凡神教を立てたる人あり。ハルトマンは無意識實體の絶對者と云ふ名目を以て神と云ふ名目を代用し、スペインサーは不可思議と云ふ異名を以て造物者と云ふ名目に代用せり。古今の哲學者は神と云ふ觀念を呼ぶに各其名稱を異にする。雖ども其實は永遠無限の實在者たる唯一眞神を指示するに於て、其哲學教系の全體の思想中に神之觀念、宗教心の開發せるものある事照々たり。老子は其道德教に於て谷神の奧妙ある事を論じたるも、孔子の天道を遵奉し、鬼神を敬して遠けしも、宗教心の哲學思想に於て變化せるものある事明白なり。吾人又た佛教興起前の印度の哲學を考ふるに、一として宗教心の精神を論ぜざるなきを見る。古代の印度哲學も同く、神の觀念の開發を充分に含有せるものあり。印度哲學の初期は無神主義の哲學即ち、方角論、時間論、我生論等あり、其他虚空論ありと雖ども、方角論、時間論と同



第 二 節

く虚空、時間と云ふもの、概念の曖昧あるより起りたる論にして時間、虚空の如きは皆な萬物の原因ありと論ぜる説あれば神に歸すべき一切性質を時間其他のものに歸せるあり。無神論に次で有神哲學起り、宗教心、神の觀念の發生は明了に指さるゝに至りたり、即ち印度の三身位、一體の神、大自在、天神と稱する神は日月星辰、山川草木、人類等一切萬物を創造せりと云ふ説出でたり。其に次で本際論ある哲學起り、宇宙の大本を水火の二に歸し、其中間に梵天、即造物主を立て、大能妙用ある神なりとせり。其後、勝論哲學、數論哲學出でたりと雖も、皆同一觀念の發生せるを見る、彼の佛教は有神教に非ず、又無神教にも非ず、然れども眞如妙躰の實在を論する點より見れば一種の有神教あり。眞如妙躰の性質を論するときの忽變じて無神教とあるなり。然れども眞如と云ふ實躰の存在するを正定する故何れにするも、同じく一種特別の有神教となさざる可らず。スピノーザ哲學は神と云ふ名目の代りに「サブスタンス」

第 五 章

ヤと云ふ名目を用ひたる如く佛教も、佛教以前の有神教と佛教を差別する爲め、神と云ふ名目の代りに眞如妙と云ふ名目を用ひたるのみ、全世界の一切哲學に普通する神の觀念は唯だ哲學教理に於て一の理論とされるのみあれば、これを以て人性より發生せる宗教と稱すべからざるは勿論なりと雖も、既に宗教と同性質の種子を有するものなることは識者を俟たずして知るべきなり。宗教進化を論するもの佛教を以て粗荒ある妄信の進化せるものなりと論すれど、余を以て見るときは佛教は唯り妄信より進化し來りたる宗教なるのみならず、此に論する哲學的、神之觀念の發生の原素に因て發達せる者となさざるを得ず。故に佛教の神の觀念の自然に發生して遂に一宗教となりたる者なれば、其不完全なるべきは當然の次第あり。

○ 第 二 節

感情及び徳義性  
宗教發生を論ず



第 三 節

神の觀念或は宗教心なるものは、人心の全体に存する觀念あれば唯り智識上のみ宗教心の開發をなすべきに非ず、通常の社會には自然的の事情の外に宗教心を開發せしむべき無數の事情あるが故、此に一種別異なる機會要求を以て宗教心を開發すべきなり。即歡喜悲哀の感情の如き、道德の義務の精神の如きは、通常開化せる社會に於て、吾人の宗教心を開發せしむるに足るものあり。人若し非常なる歡喜、非常なる悲哀に遭遇する事あらば、或は感謝の心、或は依頼願望の心を起すべし。而して非常ある歡喜にも種々あるべければ、或は自己の能力に因て來るもの、或は他人の恩佑に出てたるもの、或は偶然期せずして得たるもの、其他種々あるべし。然れども史傳に由て歡喜の心情中宗教心を發生する種類を視るに種々の場合に存するを見る也。例へば一度死せしと思ひし我が子女の生を企ふせし時、父母の心情に起る歡喜の如き、又亞米利加發見の時、コロンブスと同船せる水夫が沙漠たる大洋に於て半ば

第 五 章

失望せる時遙に陸地を眺望して歡喜せる時の如きは人々の必ず宗教心を動かして感謝、喜悅の宗教心を發生するを見るなり。悲哀、失望の極點に陥りて天に訴へ地に叫ぶの心情中には必ず宗教心の發生を見るべし。平常は神も無し、宗教も妄信なり、信ずるに足らずと思ひ居りたる人と雖ども、一朝悲哀、憂苦、艱難、困窮に遭逢して勃然宗教心を發生せしもの、歴史上其例に乏しからず、太史公の「天道是乎、非乎」の嘆息の如きも懷疑の心より出てたりとするよりは、嘆息の餘り「天道」と云ふ思想を起さしめたるものなれば、宗教心より出てたる語なりと云ふべきなり。其に反して愉快陶然たる心情より天地萬物の原因に心を向はしめ、宗教心に類似の思想を起さしむる事あり、例へば蘇子瞻が赤壁の賦を記するとき、江上之清風與山間之明月云々と歡喜閑雅の感情を起さしめ、造物者之無盡藏ありと賞美せしめたる心情の如し、然れ共これらの心情を以て直に宗教心ありと云は不可あり、只だ其の種子なりと知べし、困



第 三 節

難に遭ふて宗教心を發生せる者も多かるべし。例へばフランクの王  
 ルドウィクは其妻クロアリアに基督教を信する事を勧めらるゝも決  
 して之を信ぜざりしが、四百九十六年頃にアルンマン人と交戦して大  
 に敗れ、リーピアクの戦争に其軍塵殺せられんとするとき、遂に宗教心  
 を感發して基督教を信ぜりと云ふ。又アイウエリの王は或時山野に獵し  
 て其路を失し、迷ふて歸途を求る不能るの困難に陥り始て神を信じ其  
 冥助を願ひたりと云ふ。右は感情に由て宗教心を發生せるものなりと  
 雖ども、道德の思念、義務の心に由て宗教心を起せる實例も甚だ多し。罪  
 愆の懺悔、痛嘆の情は道德心の關する所なり。エチプトのマリヤがイエル  
 サリムの聖殿に於て罪愆の深きを知り、大に懺悔して四十年の苦行を  
 なせりと云ふ、この感情及び道德心に由て開發せる宗教心は汎亂粗荒  
 因る所なきが如くなるも、既に宗教心の特異なる發生物なる事論を俟  
 たざるあり。

第 六 章

◎第六章 客觀的宗教發生論の駁論

此章に於ては、宗教を以て外部の原因より發生せるもの  
 ありと云ふ理論を駁し、以て宗教の客觀的、外部原因の外に、人  
 心固有の宗教心の本源ありて、この本源より發生せるもの  
 たるを明證せんとする也。

○第一節

構想的宗教論を駁す

第四章第一節に於て宗教の發生を學問上の推究より論する説に客觀  
 的宗教發生論及び主觀的宗教發生論の二種ある事を述べたるは既に  
 讀者の記する所ならん。今やこの二種の理論中の第一ある客觀的宗教  
 發生論を述べ之を論駁すべき場合に到達せり。然れども之を論するに  
 先つて客觀的宗教發生論に三種の異説ある事を述べんとす。  
 客觀的宗教發生論とは主觀的宗教發生論に反して宗教發生の原因を



第 一 節

心理的内部的因に歸せずして全く外部の因に歸するもの是なり。『宗教は人間の心意に存する所の必然の要求より發生せるものに非ず。唯だ外部の人爲、或は神爲、或は自然界の催促要求に因て發生せるものなり』と論するあり。故にこの論たるや全く心意上の因を否定して惟に外界の因のみを撮り論するなり。而して如此き性質を有する理論に三種の異説あるを視る、乃ち其一を構想的宗教論と云ひ、其二を超理的宗教論と云ひ、其三を自然的宗教論と云ふ而して目下この第一節に於ては其第一種なる構想的宗教論を述べんとする也。

古來宗教の因發生を論する者に種々雜多の異説ありと雖ども、就中最も普通に聽く所の論は宗教を以て人間の想像に原因せるものありと論するの説あり。其説を聞くに古代未開の世に於て酋長或は立法者の性質を有する者が一部落、或は一國の人民を統括せんとするに當り唯た腕力壓制を以て人民を服従せしむるは長久の策に非ずと云ふ事

第 六 章

を悟りしより自己を以て鬼神の子孫となし、以て人民を敬服せしめんとせしに起因するものなりと。或は又た宗教を以て僧侶、巫者の工夫想像に出てたるものなりとするの論あり然れども要するにこの異類の理論たるや宗教發生の因を以て惟に人間の構想に歸し全く人の想像に原因するものありとする理論に過ぎざるなり。故に假に之を名けて構想的宗教發生論と稱するあり。如此き宗教發生論は太古時代に當り一時最も學者の間に信用を得たる事ありしと雖ども、中古に至りて全く其跡を絶つに至れり。然るに又た近世に至りて獨英、佛、米の諸國に於て學者中該説を主張する論者あり、我邦の學者中にも亦この説を信するもの多きを見る。吾人今學術上の見解を以てこの理論の性質を一見するに其淺見無實卑陋ある事實に驚くに堪へたるあり。故に敢て駁論も評論も殆ど要せざるものゝ如しと雖ども、しかも世間堂々たる學者先生にして或は如此き理論を信ずる人あきにも非ざれば、少しく



第 一 節

論駁を試みんと欲するなり。  
 構想的宗教論の根本たる實事證明は何ぞと問ふ。歴史上の證明是れなり。其の證明に曰く、夫れ萬國太古の歴史を閲みするに、太古は何れの國を問はず悉皆政教一致の状態を有して邦國の長權も宗教の掌權も酋長或は立法者の如きもの之れを兼有して人民を治めたるなり。又た或社會に於ては、僧侶神官の如きものを以て民心を服従せしめたるは即ち宗教の發生する原因ありと。然れどもこの歴史上の證明は眞に其實事を轉倒せるものありと謂ふべし。試に全世界の歴史及び現時尙ほ諸國に存する野蠻原人の有様を觀察せよ、未だ社會の成立なく、僧侶もなく、酋長もなき野蠻人は既に宗教を有し、或は日月星辰を拜し、或は鬼神怪力を敬ひしに非ずや。若し野蠻人の間に元來宗教なるもの存せざんば、如何して僧侶も酋長も立法者も宗教を工夫するの原因を有する乎。縱令僧侶或は酋長をして能く宗教を工夫發明せしめたるにもせよ。

第 六 章

人民の心中に宗教の念慮なく、神を怖るゝの心なくんば、宗教を工夫して人民を訓示するも、民を威すも、人民の心中に宗教の觀念なくんば、之を覺り、之を敬畏するの道理あらんや、例へば我邦太古の皇祖神武天皇が日本全土を一統し給はんとして先づ宗教を工夫し、天神地祇の説を作爲し以て人民の服従を謀り給はんとするも、人民にして未だ神と云ふ者の念慮なく、些しも宗教の何たるを知らずんば、天神の説も地祇の教も人民を服従せしむるに効力なかるべし。蓋し人の未だ知らざる者を以て人を威さんとするも決して爲し得べからざる事あり。然れども酋長或は立法者の如き者、蒙昧の人民を服従せしめ之を統御せん爲めに既に人民の間に存する宗教を利用して施政上の方便となせる實事は古今の史上に多く觀る所あり。且つ宗教は未だ社會の成立もなく、酋長も僧侶もなき蠻民の間にも存する最も普通なるものあれば決して酋長僧侶の考想に出でたるものに非ざるなり。又人間の發明工夫せる



(二四一)

事實にして全世界に播り普通一般のものとなりたるもの一もあらざれば、普く世に存する宗教を以て一己人或は各個人々の發明に係るものとなすを得ざるなり。

○第二節

自然宗教  
發生論

第 二 節

扱次には客觀的宗教發生論の第二種なる自然發生論を略述して少しく論辨する所あるべし。自然宗教發生論とは宗教を以て人間の工夫想像に出でたるにも非ず亦人心の内部要求に因て出でたるにも非ず即ち自然に發生せるものなりとする理論是れなり。然れども宗教の自然發生を主張する論者中にも實に種々雜多の異説ありて甚だ一様ならざるなり。或は宗教を以て人類の始祖が森羅の像、萬物の現の恐るべく且つ慄くべきものを觀て而して其の恐怖心より宗教と云ふものを生出せしものありと。例へば地震、雷電、海嘯、颶風の如き異狀あるものを視

第 六 章

(三四一)

て大に恐懼し、而して其恐怖心は即宗教の原因とされるものありと論する學者あり。或は人類の始祖が萬物の美麗なる裝况や畏敬すべく、尊重すべく、好愛すべき諸現象を觀て遂に敬神の念を起し以て宗教の原因となせるものなりと論する學者もあり。何れにするも其の理論の根據とする所の極點は同一あり。又た近世進化論の一度世に出でしより進化の理法を宗教の理論に適用して宗教の發生を論ずる者あり。其説を聞くに、曰く宗教の原因は幽と顯との二物の妄信あり。始め人は、無機物中に人の見るを得へき性質の顯跡と、人に見るを得ざる性質の幽跡ありと妄信せしがこの妄信一變するや靈魂存在の信仰とあり、遂に神或は鬼神の存すると云ふ如き信仰に進化するに至れるものなりと、是れ單に進化論者の宗教發生の論なり。

右三種の異説を一々論駁せんに、第一に吾人々類の心意に宗教の天性あるに非ず即ち萬物の恐怖すべき現象を觀て宗教心を發生するもの



第 二 節

なりと云ふ此理論は決して基立す可らざるなり。如何とあれば、唯り原人のみならず、今日の開明人と雖も驚怖すべき萬有の現像を觀れば、勿論驚怖心を發すべき也。然れども如此き驚怖心は直に宗教上の驚怖心となるべき道理なし。通常の驚怖心と宗教上の驚怖心とは心理學上大なる差異あるものなり。萬物の現象を觀るのみにては決して宗教心と云ふ如き奧妙なる思想を發生すべきに非ず。若し種々異様なる現象を視て宗教心を發生するの事實あらば、是れ人間の本然固有する宗教心を開發するの機會を與へたるに過ぎざるあり。他の動物と雖ども人類と同じく萬物の現象變化を恒に見居るあるべし故に怖しき物あれば其を恐れ、喜ふべき物あれば其を悦ぶべしと雖ども動物界中吾人未だ宗教に類似せる現象だも見得ざる也。論者或は云はん人類には高尚なる智識あり、思想あり、感情ありて大に動物と懸隔する所あれば人類のみ宗教心を起さしむる敢て難きに非らざるなりと。夫れ然り、然れど

第 六 章

も斯く云は既に自家の所説に撞着するも非ずや、論者の得意ある進化説に由れば其原始人類の未だ進化せざりし以前は人類も動物も同一智識の程度を有せしにて人類は始より如此き智識思想を有せる者に非ずと。果して然らば動物と異なるなき人類の心意に、如何して宗教心の如き思念起り、如何して神と云ふ觀念を造り得べきや、吾人之を知るに苦む也。開化せる人と雖ども唯だ萬物の現象を觀察して得る所は乃ち萬物の善惡、醜美と云ふ念慮に外ならず。是れ決して宗教心にも敬神の情にも非ざるなり。若し人類に天性宗教心なく、又た無限に開發せんとする天性なくんば、吾人五官を以て如何なる事物を知覺すると雖ども、今日世に存するが如きの鬼神教、偶像教其他一切の妄信を發出せしむるを得ざるや明白なり。彼の進化説の如きも、以上の説を一步進めて其原因を他に歸したるのみ。進化論者の宗教の原因、本素なりと云ふ。顯二昧の觀念の如きは少しも宗教心に類似する所なきあり。故に野蠻



第 二 節

人は人影を見て人の靈魂なりとするも、是れ決して宗教心には非ざるなり。萬物を以て神とするも、萬物の現象を以て諸々の神とするも、其原因は人性宗教心を固有して物に觸れ事に感してこの心を發生せんとするより起りしあり。屢々論述せるが如く、萬物の現象は固より宗教心を開發する機會となる事あるべし、是れ吾人既に第四章の第一節及び第三節中に論述せり。讀者之を參照すべきなり。然れども其機會を轉じて直に原因とするは吾人の未だ探らざる所なり。故に人類心意の最蘊底には元來宗教心の潜伏して存在するを種々なる萬物の現象に由て開發し、内外の感情思想を相聯合して遂に萬物の現象を神とするに至るものなり。悉細は既に第四章に論述せり。

○ 第二節

超理的宗教發生論

以上二節に於ては皆な宗教を以て外界の原因に由て發生せし者なり

第 六 章

と云ふ誤謬論を辨じたるものなるが、この第三節に於て論駁せんとする宗教發生論も、亦宗教を以て外界の原因に由て發生せし者なりとする理論なり。然れどもこゝに論駁せんとする理論は以上の二説に異りて、神を以て宗教發生の外界原因ありと論ずる説なり。この説に因るときは、宗教なるものは人間が神より直接に受けたる所の啓示取も直さず、神より與へられたるものなり。故に客觀的原因に由て來るものなれば、少しも人心の内部に原因する所なきなり。この理論を主張せる學者は十七世期、十八世期代の新教派の神學者なり。又哲學者中にもこの極端説に左祖せる者少からざりしあり。即ちイマガンミル、レック、レーツェルの如きは、惟り宗教のみならず、甚しき人類の言語の如きも皆な神より人間が直接に受けたるものありと論ぜり。然れども今日に至りての如く、説を爲す者非ざるべし。今この説の重なる欠點を擧ぐれば、人性に本然宗教心の存在を拒否して唯だ神之を受與せる者な



第 三 節

りとする一點なり。之を詳説すれば、人間の心意は元來無一物にして本然觀念と稱すべきものは一もなく、恰も無紋無章の白紙の如きものなり。然るに神は天啓を垂れ、この白紙の上に宗教の訓令を書き給へるなり。故にこの白紙には本然觀念として宗教の成文あらざりしなり。果してこの説の如くなれば、人間はいまだ天啓を受けざりし以前は無宗教にて生活せるにや。若し人間の心意は創造の時既に神の法律を印章銘記せられたるありとせば、吾人も同意する所の説にして、天啓を受けざりし以前も無宗教にて生活せるに非ずと答ふるを得べしと雖も、斯くては、しかも愚昧の自家撞着あるべし。實に主觀的宗教心の存在を拒否するは恰も人間を以て一の器械の如くあらしむるの論なり。若し人類の心意に神の啓示を受るも、之を理解し之を活用する特殊の心情なくんば、流水に字を書すると同く徒勞の業務たるべし。吾人の心意に天性の宗教心あり、此心の要求ありんば、天啓も何の効なく、神の教指も

烏無に歸せんのみ。恰も美妙の觀念なきものは萬物の美妙を感ぜざるが如くなるべし。

◎第七章 主觀的宗教發生論の駁論

此章に於ては専ら宗教を以て内部の原因より發生せるものなりと云ふ理論を駁し、而して宗教の主觀的内部原因の外に、人心固有の宗教心の本源ありて、この本源より發生せるものたるを明證せんとする也。

○第一節

動物性宗教發生論

前章に於ては宗教發生の原因を外界に歸し、宗教を以て客觀的の發生なりとする理論を辨駁せり。前述の駁論中に明了なるが如く、該説の誤謬の根本は宗教發生の原因を外界にのみ歸して、少しも内界即ち心意上の原素を酌量せざりし事是れなり。然るに此に論述せんとする所の

第 七 章



第 一 節

主觀的宗教發生論は全く前説の反對なりと知るべし。前説は宗教を以て外界の原因に依て發生せるものなりと論ずるに反して、主觀的宗教發生論は宗教を以て内界の原因に由て發生せるものなりと論ずるなり。即ち前説に於ては宗教を以て萬物の影響或は神人の想像教指に由て出でたるものとするに反して、この説に於ては宗教を以て人心の動作要求に由て出でたる者なりと論ずるなり。

扱この理論も前論と同く種々の異説あれど、大別して四種に區分するを得べし。曰く動物性宗教論、曰く主我的宗教論、曰く厭世的宗教論、曰く進化的宗教論是れあり。

諸この第一節に於て考究すべきは、動物性宗教發生論と名くる理論なり。吾人々類は本と是れ動物中の一物なり、人類は動物ある以上は人類も動物性を有するを免れず、實に解剖學、生理學、心理學の證する如く人類にも動物に異なるなき種々の性質を存するを見る。此に於てか宗教

第 七 章

も人類固有の動物性より發生せるものなりと云ふ極端説を出すに至りたるあり。この説を學術上の理論として盛に提稱せるに至て近世の事なりと雖ども、古代の哲學者中にも大同小異の説をなせしものあり、即ちエヒクロー、ルクレチ、ペトロタイの如き是れなり。近世に至りては、コプ、ス、エム、シトラウス、ダールウエンの如き論者は是れなり。

實にこの一段は動物及び人類の心意を觀察して、理法を發見せんとする近世進歩の心理學上に大なる關係を有する理論なり。

故に吾人は先づ此理論の一斑を述べて、而して後此論の辨駁に及ばんとす。今こゝにダールウエンの「人類生來論」に最も簡短に此理論を述べたる章句あれば、之を採萃して讀者に示さん。同書に曰く、下等動物も人類と同く苦樂、幸、不幸を感じる能力あり、又た驚懼の感情の如きは、やはり人類にも、動物にも同様の影響を以て發作するものなり。下等動物も人類と同く物に驚くときは、筋肉を震搖し、心脈を激動し、毛髪を怒らす



第 一 節

なり、而して驚怖心は猛獸及び人類に於て特に激烈なるを見るなり、(中略)是れ即ち動物性宗教の起る原因にして、此驚怖心は即ち宗教心と同一なり」と。是れ等は動物性宗教發生論の一斑を示すに足る確實ある出所のある説あり。然れども吾人はダールウェン氏及びこの派の學者に向て質問せざるべからず。若し夫れ人類も、下等動物も同く宗教を發生すべき性質を有し、動物、人類の俱有する驚怖及び苦樂の感情は是れ宗教の原因原素ありとせば、動物界中にも人間の宗教と同様ある宗教の如きもの起るべき等ならずや。人類も、動物も宗教の原素なりと云ふ驚怖心及び苦樂の感情を共有せば、人類も、動物も同く宗教を發生すべきは自然の道理なり。ダールウェン氏同書に於て、宗教心は尤も複雑ある心情なれば高等ある進化を遂げたる高等動物に於てのみ宗教は發生するを得べしと論ずるも自家撞着の理論にして、決して動物性宗教發生論の誤謬を補綴するに足らざるなり。若し果して氏の言の如く複雑なる

第 七 章

宗教心は高等動物に於てのみ發生する者とせば、吾人先づ其高等動物と云ふ事を研究せざるべからず。高等動物とはこの世界に於ては人類其ものなるべし。然るに高等動物なる人類は既下等動物に非ざるを以て、其下等動物の未有せざる異様の心意作用を有するものなり。人類の一動物に過ぎずと雖ども既又特別ある情操を有し、特別なる智能を有する動物なり。果して然らば、宗教心の起り發するに決して動物の普通に通に有する同一心意に原因するものと云ふべからず。人類には他の動物の有せざる複雑にして特別なる心意作用ありて、此心意よりして宗教心の發生する者ある事明了あり。或は又た人類、動物の共に普通に有する性能は特に人類に於て著しく發達せるよりして、宗教心を發生するに至りたるありとせば、動物と人類との間に宗教心の相類似せる表顯を見るべきあれど、未だ嘗て吾人之を見ざるなり。然れどもダールウェン氏は人類と動物との間に宗教心の類似點ありと論ぜり。即ち犬猫の



第 一 節

其主人に對する愛情及び驚怖心の如き感情あるは是れ犬猫の宗教心なりと論ぜり。然れども吾人は心理學上の事實、實驗より動物の主人に對する驚怖心と人類の宗教即ち神或は鬼神に對する驚怖心の異同を明了にせざる可らず。動物の驚怖心は無意識夢寐の最單純なる驚怖心なり、この單純なる驚怖心と宗教の複雑ある驚怖心との間には根本の差別あり、宗教の驚怖心は敬畏なり、單純の驚怖心には忌避、憎惡の心情の外、他に何らの心情をも包含する所なし。然るに宗教の驚怖心は忌避、憎惡の心情を含有せざるに非ずと雖ども、一般に云ふときは尊重、畏敬、願望、敬虔、信仰の諸元素を以て成立するものなり。且つ單純なる驚怖心は全く物質的にして、世界の事物と相結んで起るものあり。視よ小兒は雷鳴を聞きて之を鬼神なりとは想像せざるも、非常なる雷鳴を聞ば必ず驚怖せん、されどこの驚怖心は決して宗教上の驚怖心と同一視すべき心狀に非ざるなり。野蠻未開の民は非常なる暴風雨や、非常なる地震

第 七 章

に遭はば必ず驚怖戰慄せしなるべし、然れどもこの驚怖心は決して宗教上の驚怖心と同一に非ざるなり。既に度々論ぜし如く如何なる驚怖心と雖ども人類固有天賦の宗教心を開發するの機會たるを得べしと雖ども、宗教心を造作するの原因たるを得ざるや敢て多言を要せずして明白あり。

○ 第二節

主 我 的 宗 教 發 生 論

主我的宗教發生論とは即ち宗教を以て人類固有の利己、自愛の心より發生せる者ありと論ずる説を云ふ。この説に因れば宗教なるものは人と神とに於ける關係に非ずして、各個人が自己に對する關係なり、人間は自己を立て、神となし、自己を讚美し、自己に祈禱し、自己に供獻する者なり。然れども人間は自己に之を行ふと思意せずして、自己より最上なる神に讚歌、祈禱、供獻するものなりと信ずるなり。吾人全世界の宗教



(六五一)

節 二 第

を觀察するに、皆な自己の利益、自己の幸福、自己の愛を以て主眼とするものにして如何なる宗教と雖も神を以て自己を守護し、自己に幸福を與ふる者なりとせざる宗教の非ざるなり。今此に宗教てふ一大問題を解釋せば、神の自己を守護し、自己を利益幸福し、自己を救済し愛憐する者なりとする問題なり。自己の宗教の大眼目なり、故に宗教の原因及び目的の利己心なり。全宗教の發生せる原因の即ち利己主義なり。人間の最も強愛する所の何ぞと云ふに自己の生命より大なるの無けん、人既に自己の生命を愛し自己を永く保持せんとする願望ありて、人間の想像力盛んに發動するとき、人自己を以て如何ある者と妄想すべき哉と云ふに即ち不死不滅なりと妄信するに至るの自然の勢なるべし。是れ宗教の起る原因ありと。

以上開陳せる理論の主我的宗教論の大意あるが、その重要ある論據の宗教發生の原因を以て人間の利己心及び妄想なりとするにあり。他言

章 七 第

(七五一)

以て之を云へば、宗教の利己心に始りて妄想に成り、遂に全世界の信仰となりたるものなりと。抑この論の主稱者のヘールバート氏なり。實にヘールバート氏の人類歴史の大半を以て人類の妄想ありと斷定する者あり。吾人試に古今の歴史を繙き全人類過去の成績の有様を視よ、何れの時、何れの國を問はず凡そ人類の生存して人語を聞くを得べき所に必ず宗教の存するを視るに非ずや、宗教中固より妄信邪教あきに非ざるも之を以て普く人類の妄想なりとするの人類の生存を以て妄想ありとする者に非ずして何ぞや。ヘールバート氏の宗教を以て利己心の結果なりと論すれど、是れ歴史上の事實に反したる論あり。試に古今の宗教史を閱せば、凡そ宗教なる者は其開不開を論せず、嚴肅的精神を含有せざるなく、克己の効徳を要求せざるなく、皆な自己を棄て私を去るは宗教一般の教則なるを見る嚴肅、克己、自制、自棄は皆な人間の自愛心に相反する心情なりと雖ども、又宗教上に對して大なる功德を



第 二 節

有する心情あり。又た吾人既に論ぜる如く、宗教には宗教的の雅美の精神、美妙の理想あり、この精神、この理想に到達せんとするは即ち宗教の目的なり。然れども吾人美妙を美妙なりとして愛する心情は利己心と何の關する所あらんや。又た宗教は至高の真理、完全の徳義を得るを以て目的とするものなり。然れども真理、徳義の二者を得んとするには、情慾世界の妄見に勝つ利己自愛の私欲、私情より生する一切の罪惡を去らざるべからず。若しこの見識、この効徳なくんば、真理、徳義の二者は決して得らるべきにあらず。ソクラテスの真理の爲めに鳩殺を甘ぜる、千古の歴史を照すに非ずや。ソクラテス豈に利己心の爲めに自己を犠牲に供せんや。ソクラテスは利己自愛の私欲に沈溺せるアゼンス人の反對者あり。基督の人類救贖の爲めに十字架の刑死を以て潔よしとせしは豈に自愛の爲めならんや。キチダアルノチが理學上の新説を唱へ、爲めに「パーバ」の審逐する所となりて火刑に所せられたるは果して利己

第 七 章

心の爲めなる乎、ガリ、オが天動説を主張して、羅馬教徒の爲めに審逐せられ、ステハンが真理の爲め、仁愛の爲めにユヂヤ人の爲めよ石撃の死を遂げたるも皆な利己心、自愛心より出でたる乎、人誰か斯かる妄説を信する者あらんや。

○ 第三節

厭世的宗教發生論

第一節動物性宗教論に於て、宗教を以て單純なる驚怖、畏懼の心情より發生せるものなりとする理論を辨駁せり。然るに此に論ずる所の厭世的宗教論も人類の宗教を以て同く單純なる憂苦、悲痛の心情より發生せるものなりとする理論なり。吾人は少しくこの説を述べ辨駁する所あらんとす。

抑厭世主義の哲學は近世日耳曼に起りたる哲學にして、大に社會に傳播し其影響の及ぶ所、惟り哲學、文學の社會に進捗せしのみならず、教會



第 三 節

及び神學の上に大なる影響を及ぼせり。特に新奇を好む少壯の學者輩は多く該説に雷同せられたりと云ふ。この哲理の主稱者はシヨペンガールにして、其哲學を祖述完成せる人はハルトマンあり。ハルトマンは、しかも純全たる厭世敎家にして、自説を應用して一切の宗教をも人間の厭世心即ち憂苦、悲嘆の感情より發生せる者ありと論せり。其重要な敎旨の部分をニコライ、ロステストゥエン氏の引用せるものを此に重譯せん。ハルトマン曰く、全世界の一切宗教は皆ち厭世主義を基本とする者なり。人間の厭世心は宗教を發生する最初の原因にして、艱難悲哀、憂苦は宗教を生むの母なり。宗教なるものは物質上の罪惡、道德上の罪惡を以て人間の心意に惹起せる不滿、不足、憂苦、悲嘆の感情より發生せる者なり。人間若し不幸なる困難、罪惡の痛楚を感ずるなくんば、この世の幸福を以て満足する故、敢てこの世の外に於て幸福を得んとする願望を生ぜざるべし。然れども艱難、憂苦堪へ忍ぶべからざるものあり

第 七 章

て殆んどこの世に願も望も置く能はざるに至らば、人必ず宗教の道を求め、この世の外に於て幸福安樂を得んとするに至るべし。是れ即ち不幸、艱難、痛苦の感情は宗教を發生する所以なり。是れ厭世的宗教論の一般を示すに足るものなり。吾人は簡短に此理論を辨駁し去るべし。先づ第一に憂苦艱難の厭世心は果して宗教心を創造し發生せしむるを得べきや否やを論究せん。吾人心理學上の事實、理法を考ふるに、悲痛憂苦の感情は如何に強く發動するも、一種特別なる他の心狀を創作する能はざるを見る。悲痛憂苦の感情は宗教心に比すれば、遙か單純なる感情なり。宗教は感情のみを以て基本とするものに非ず、智力、意志の複雑なる心意作用を相合して共に宗教心の基本を成すものあり。然れども余は悲痛憂苦の感情を以て宗教心を提起感發するの効力なしと云ふ者に非ず、唯だ單純なる憂愁悲嘆の感情の宗教心を創造發生するの勢力なしと云ふ事を主張するものなり。吾人日常經驗する如く不幸、災難、



第 三 節

疾病の如きものは、將に消失せんとするの宗教心を感發するに足るものなり。我邦の俗諺に「苦時頼於神」と云ふ言あり。平素宗教に冷淡ある人も自ら不幸災難に遭遇するか、猖獗ある疫疾の流行する際などに勃然宗教心を誘起する事あり。是れ吾人の多く經驗する所あり。悲嘆憂愁の感情の聯合作用に由て更に同類同種の感情を誘起する事あり。或の類似の聯合作用に由て更に他の艱難憂苦の心情を喚起するを得べし。例へば本年七月の中旬に會津の人民が磐梯山破裂の困苦に遭ふて、維新戦争の患難を思ふたるが如し。或の對比の聯合作用に由て反對なる感情を誘起する事あるべし。然れどもこの心理學上の理法を脱して、憂苦の感情の宗教心を發生するを得べしとの想像だも爲し得ざるあり。唯だ憂苦患難の心情の宗教心を誘起するの機會となるを得べきのみ。第四章の第四節及び第五章の第三節を参照すべし。且つ宗教心を誘起感發する心情の惟り憂苦患難の心情のみならず満足、安寧、歡喜の心情

第 七 章

も同く宗教心を誘起するの機會となるものなり。故にヘーゲル氏の宗教を人生の樂しき祭日に比せり。バルトマンが厭世心を以て宗教を生むの母なりと云へるに反して、吾人の厭世心を稱して失望自棄の自殺を生むの鬼子母神なりと云はん。

○ 第 四 節

進化的宗教發生論

現世期の文學社會に一新機抽を現して學術、哲學、宗教の何れにも同一原理を應用し至難の問題を解答せんと試みしものあり。即ち進化論者あり。進化論は特にスペンセル氏の創考に出でたる理論に相違なし。雖ども昔時はこの類の理論を總稱して宗教發生説の靈魂論アニミスムと稱せり。フイロル、リヨボックスの諸氏皆な同説に左袒せる學者ありと覺へたり。今其理論を聞くに、曰く全世界の宗教の發生せし原因は野蠻蒙昧の時代に原人は夢を誤解し、氣絶、昏睡等の理を知らざるより、萬物にも人間



第 四 節

にも同く幽顯二骸及び肉骸靈魂の兩骸ありとする妄信の起りたるは即ち宗教發生の原因也」と是れ靈魂論及び今日我邦に於て進化論と稱する理論の原理とする説あり。彼輩は重もに神靈界の信仰の起原を論究してこの信仰を以て一切宗教の發端なりと論ぜり。進化論者は宗教發生の道理を推究せん爲め、今日世界に生存する野蠻人の信仰を觀察し、人種學、原語學、邪宗傳記、鬼神誌の如きものを多く材料として理論の全體を組成せり。進化論者の説に由れば、先きにも論述せし如く宗教の起原は物に幽顯二骸あり、人に靈形の兩骸ありと云ふ妄信なり。この妄信は次第に進化し、開發して今日の如き宗教を成せるなり」と故にこの理論に於て第一解答せざるべからざる問題は、如何して原人は靈魂のある事を知り、如何して靈魂の無形なりと云ふ信仰を得たるやと云ふ頗る困難なる問題なり。然るに進化論者の無造作にもこの問題を解答して曖昧極りたる理論を立てたり。其論に曰く原人の夢るときに數々

第 七 章

既に死せる者を夢に見て彼等と談話し、或は戰爭せる事などを夢るときに、原人の夢と實際の事とを區別するの智識なき故、死者も度を現れ出て、原人と交際する事ありと云ふ信仰を起し、遂に物骸に異ありたる無形の靈魂ありと妄信するに至れるなり」と云ふ。且つ進化論者の説に由れば、原人のこれらの原因に因て靈魂の信仰を得たる後種々の經驗を積んで次第に進化し、遂に神即ち無量の靈魂と云ふ觀念を得るに至れるあり」と、其他宗教發生の原因として天文、氣象、生物、陰影、回響の如き諸現象に關する原人の智識信仰を論ずるものあれど、是れ甚だしき妄想にして宗教の原因にも、妄信の種子にも非ざれば、吾人の是れが辨駁の勞を取らざるべし。唯だ上來述べたる所の重要なる理論のみを論駁すべし。

偕て上來論述せる理論の進化論者の宗教發生論の概畧なるが、吾人を以て之を觀れば、この理論の宗教發生の道理を充分に論ぜしに非ざる



第 四 節

ハ勿論、靈魂の想念の發生せる次第をも未だ充分に解釋し得たるものと云ふべからず。此理論を外部より一見するとき、靈魂の想念の發生せる道理を解釋せるもの、如く見ゆると雖も、能く理論の根本を查究するとき、直に空論詭辯説たるを發見するを得べし。正しくこの論の解釋し得たる所を云へば、唯だ「死せる者」「生ける者」と云ふ思念或は「目に見ゆる者」「目に見へぬ者」と云ふ思念を得るに至りたる次第を解釋せるのみ。靈魂の性質に關して人間の有する總念を云へば、如何に之を不明晰に解するも、靈魂の性質を正面より解して無形なるものとする不能も、非物體或は肉體に異なる實體と云ふ總念なり。然るにかゝる總念は、決して夢或は昏睡或は睡遊などの中に於て得らるべきに非ず。是れ今日の開明人すらも尙ほ能せざる事なるに、未開野蕃の原人に如何して此總念を得らるべきや。吾人彼の夢に於て既に死せし親戚、友人を明かに見るを得べしと雖も、夢中に現はるゝ人間は靈體とありて見ゆるに

第 七 章

非ず、生ける常人と異なるべき様狀を以て見ゆるなり。夢中に見る所の人は少しも常人に異なるなし。即ち夢に見る人は常人の如く身體を有して衣服を着、或は時として世に流行する新調の衣服を着て見ゆる事さへあり。故に夢なるものは決して「靈」と云ふ不可思議の思想を人心に生ぜしむる能はざるや明かなり。夢中に見る人は少しも靈と類似せる所なく、「靈」は却て夢中に見る人の様狀に反して無形無象の性質を有するものなり。果して然らば原人が夢中に見たる有形の人より推して無形の「靈」と云ふ總念を得たりとするは、又甚だしき妄想と云ふべし。原人は「靈」と云ふ總念を夢其他昏睡、中風等に由て得たるならんと思像するよりは、寧ろ日夜呼吸する所の空氣の何たるを知らざるより、この空氣を妄想して「靈」と云ふ總念を得たるならんと思像するは却て容易なるべし。如何となれば古代は哲學者さへ人間の靈魂と空氣とを同一視せる者ありしに由る。原人が「靈」と云ふ總念を得るに至るは夢其他昏睡亦



第 四 節

どの如きもの、助けを要するよりは、日常の反省、自覺の最も單純なるものを以て事足るべし。進化論者が想像する如く、原人は如何に曖昧あるも如何に蠢愚あるも、この原人は自己の自覺も亦く、自己の心を反省する内、向感覺の種子だも有せざるべしとは想像することを得ざるなり。原人に内、向感覺の種子もなく、反省力の發端もなしとするは原人の人類なるを拒否して、動物ありと思想することにあらざるなり。故に原人にも反省力の下等なるもの存すると云ふとは進化論者と雖ども敢て拒否する所に非ざるなり。彼の未開蠢愚の原人にも不完全ながらも反省、内、向感覺の存する以上は、原人と雖ども自己の工夫する事、自分の物を感じる事、考ふる事、其他一切の感情の心内に起るを自ら經驗せざるべからざる道理なり。原人よして既にこの經驗あらば、この内部經驗に由て身軀の内に、自分の目にも、他人の目にも見へざる所の無形なる心の存するを自覺せざるを得ざる道理なり。未開の野蠻人は如何に蠢

第 七 章

愚かりと雖ども、我が心内に起る驚怖喜悅の如き心意作用の存するを自覺せざるの道理なきなり。未開の野蠻人は自己の心意を開明人の如く明了に自覺せざるは勿論なりと雖ども、自己の身軀の内に別に發動するもの、生活するもの、存するを自覺せるや疑ひなし。内、向感覺に由て如此き自覺を得、亦た他に多くの經驗をも得るに至らば、不明晰ながらも靈魂と云ふもの、總念を得るや必然たり。又た夢は人惟之を能するのみならず、他の動物と雖ども敢て夢見ざるに非ざるなり。例へば犬の夢中に吠ゆる如し、又た何も外部に於て犬を驚すの原因なきに、恰も物に驚きたる如く直に醒て走馳する事あり。吾人これらの實事を觀察せば、動物も睡眠中に外界に存在する事物を想像し再現するが故に夢見なりと斷定するを得べし。ダールウェン氏曰く有名ある學者の實驗せる所に由れば鳥類、犬猫、牛馬の如き高等動物も甚だ明かなる夢を見ると云ふ、此事實より推せば動物もある階級の想



第 四 節

像力を有する事を知るべし。若し夫れ人間に幽顯二躰の觀念を始て生ぜしめたるものは夢其他之に類する心意の状態ありとせば他の動物と雖も此觀念を生ずるの原因ある夢を有する故動物も幽顯二躰の觀念を有すべき筈なり。去<sup>レ</sup>と吾人は彼の動物界に於て之を發見するを得ざるなり。進化論者自ら人類と他の動物との間に最も類似せる性質の多く存する事を知りながら、靈魂の觀念を動物界より去りたるは果して何の意ぞや、吾人は之を知らんと欲するあり。若夫れ夢其他之に類する事情のみにて、人間に靈魂の觀念を生ぜしめ、次て靈魂不死の信仰、冥界の信仰、神の信仰等を發生するに足る者ありとせば他の動物にも亦た是れに類する思想信仰を發生すべき道理なるに實際斯かる現象を吾人は見るを得ざるなり。ある階級の想像力を有する動物は如何して靈魂及び宗教などに類する如きもの、信仰を有せざるかと云ふに、動物心意の不完全なるに由る事は勿論ありと雖も、第一自己と云ふ自

第 七 章

覺なく、思想なく、斷定、推理の心意作用なきに由る事なり。ダールウヰンはテイロル氏の夢は靈魂と云ふ思想を生ぜしむるの第一原因ありと云ふ説に一制限を附して曰く、人類に智力の高尙複雑なる作用例へば斷定、推理の如き思想の未だ充分開發せざる間は夢に如何なるものを見るも、決して靈魂の思想信仰を發生するを得ざるべし。恰も犬猫は夢ると雖どもかゝる思想信仰を生ぜざるが如し。故に人類に始て靈魂の信仰を發生せしむるものは決して夢及び昏睡、中風の如きものに非ず。この思想、信仰は全く他の原因より生じ來るものあり。即ち他の動物の有せざる斷定、推理の思想作用に由て發生せるものなり。ダールウヰン氏の自ら云ふ如く人類に靈魂と云ふもの、信仰生ずるは既に人類進化して斷定、推理の心意作用を得たるの後ならては、この信仰は決して夢其他の心意の状態に依て生ぜしに非ざるや明白なり。人類既に斷定、推理の心意作用あらば夢と實事とを混合するが如き事、勿論非らざる



べし。然れども動物にはこの心意作用なきが故に、夢るときは夢と實事を差別するを得ざるなり。動物は夢中に見る所の「妄像」より「自己」「實事」を判別するの反省思想の作用を有せざるが故に、従て靈魂と云ふ高尙なる觀念を得るに至らざる者なり。如此き道理なるが故に、進化論者は靈魂と云ふ觀念の發生せる原因を夢に歸すると雖ども、斷定思想の作用もなく、反省々察の思念も亦く恰も動物と異なるなき未開の原人の夢其他是に類する心意の事情のみにては決して靈魂と云ふ總念を得る能はざる次第なり。若し又た原人が既に斷定、反省の思想作用を得たる後に夢の妄想に因つて靈魂の觀念を得たるなりと云はば、是れ自家撞着の沙汰のみ。如何とあれば既に斷定、反省の思想作用あらば原人は既に夢中の妄想と實事を明了に區別し、主觀的思想と客觀的の實物とを辨するを得べければ、夢よりして靈魂と云ふ如き信仰を生ぜざるや明白なり。例へば原人は夢に、死去せる知己、友人と談話し、或ハ山に獵

し、川に漁りたるを夢るも、夢醒て後ち傍に夢中に見たる人の死骸の横りあるを見、睡眠中に談話せるは夢に外ならずして實事に非ざる事を悟るべし。如此く睡眠中に遭遇せる事は實事と非ずと云ふ事を度々經驗せば、夢と事實の混同を判斷する事を得べし。故に夢よりして靈魂と云ふ思想を得るの道理は決して非ざるあり、况や宗教をや。



版權登錄

明治二十二年三月四日印刷  
全年七月七日出版

定價金五拾錢

著者兼  
發行者

宮城縣平民

石川喜三郎

東京神田區駿河台  
北甲賀町十二番地

印刷者

東京府平民

佐久間司馬介

東京々橋區西紺屋  
町二十六七番地

版權所有

發行所

哲學書院

東京本郷區本郷六  
丁目五番地







文學士 井上圓了君著  
 第一篇定價金七錢、第二篇定價金九錢、  
 第三篇定價金八錢、郵稅各貳錢

文學士 井上圓了君著  
 第一卷 定價金三拾錢  
 郵稅金拾錢

文學士 井上圓了君著  
 全一冊 定價金拾五錢  
 郵稅金四錢

內閣官報局翻譯課長文學士 濱田健二君著  
 全一冊 定價金拾貳錢  
 郵稅金五錢

文部省參事官 杉浦重剛君著  
 全一冊 定價金六錢  
 郵稅金貳錢

高等商業學校教諭文學士 土子金四郎君著  
 全一冊 定價金三拾錢  
 郵稅金八錢

文學士 棚橋一郎君著  
 全一冊 定價金貳拾錢  
 郵稅金六錢

平松埋賢師編  
 第一 定價金貳拾五錢  
 郵稅金六錢

そろもんわう  
 の  
 せんげんあり

人に智慧と訓とをまらしめ哲言を曉せ。  
 拙者を賢からしめ少者に智識と聰明と  
 を得しめん爲なり。智慧ある者ハ之を聞  
 て智識をまし明哲者ハ身を脩むる道を  
 得べし。\*\*\*エイコハを畏るゝみとは  
 智慧の始あり。聖ものを知るは聰明あり。



二/2P42

若智慧入爾  
心。知識娛樂  
靈。則謀畧必  
守爾聰明必  
保爾。

箴言